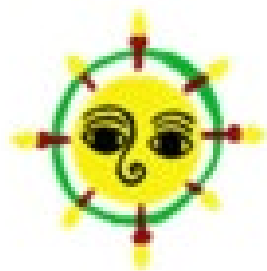


第 33 回 日本ナイル・エチオピア学会学術大会  
プログラム・要旨集

The 33rd Annual Conference of the Japan Association  
for Nilo-Ethiopian Studies

Program and Abstracts



主催 日本ナイル・エチオピア学会

(Japan Association for Nilo-Ethiopian Studies)

シンポジウム共催 東洋大学国際共生社会研究センター

(Center for Sustainable Development Studies Toyo University)

日時 2024年4月20・21日(土・日)

公開シンポジウム 於 東洋大学白山キャンパス8号館7階 125ホール

研究発表 於 東洋大学白山キャンパス1号館 1305教室

## 全体スケジュール Overall Agenda

【4月19日 金曜日】 運営幹事会

17:00～19:00 運営幹事会 Secretariat Meeting

【4月20日 土曜日】 評議員会・公開シンポジウム

11:30～12:30 評議員会 Board of Trustees Meeting

14:00～16:00 公開シンポジウム Public Symposium

【4月21日 日曜日】 研究発表・総会 Presentations, General Assembly

9:20～ 9:30 会長挨拶 Opening Remarks

9:30～12:00 研究発表（第1・第2セッション） 1st & 2nd Session for Presentation

12:00～13:00 ポスター発表セッション Session for Poster Presentation

13:00～14:00 昼休み Lunch

14:00～14:45 総会 General Assembly

14:45～15:05 高島賞授与式 Takashima Prize Award Ceremony

15:10～16:25 研究発表（第3セッション） 3rd Session for Presentation

16:35～16:45 最優秀発表賞授与式 Best Presentation Award Ceremony

16:45～16:50 閉会挨拶 Closing Remarks

## 口頭発表のみなさまへ

### For Oral Presenters

口頭発表の時間は 25 分です。

内訳は発表 20 分、質疑応答 5 分となります。

タイムキーパーは、次のようにベルを鳴らします。

15 分経過：ベル 1 回 予鈴

20 分経過：ベル 2 回 発表終了

25 分経過：ベル 3 回 質疑応答終了

The oral presentation time is 25 minutes.

The breakdown is 20 minutes for presentation and 5 minutes for Q & A.

The timekeeper rings the bell as follows:

15 minutes passed: 1st bell

20 minutes passed: 2-time bell to end the presentation

25 minutes passed: 3-time bell to end Q & A

## ポスター発表のみなさまへ

### For Poster Presenters

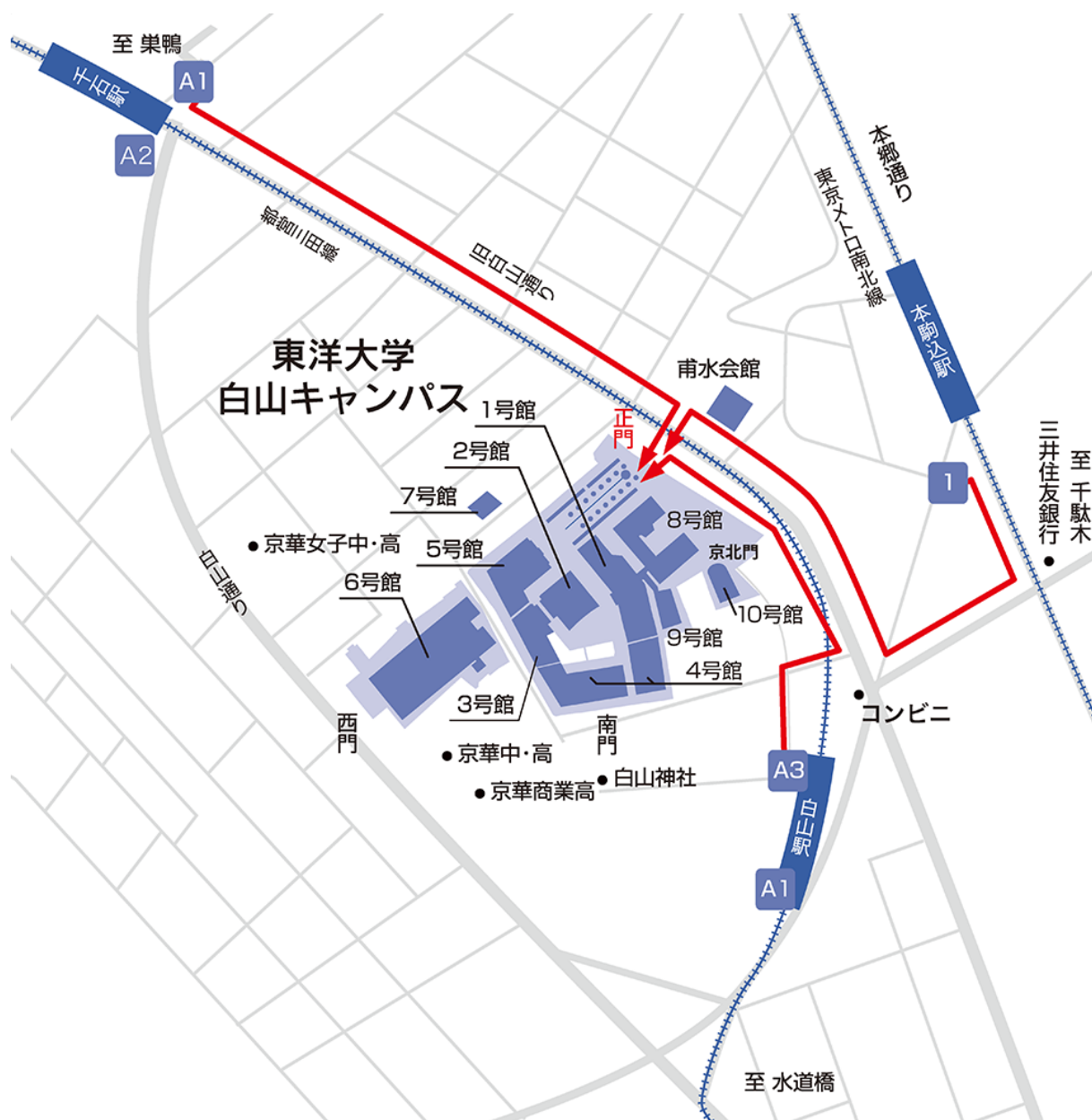
ポスター発表のセッションは4月21日（日）12:00～13:00です。

1号館3階1305教室（口頭発表と同教室）の指定の場所に、セッションまでに掲示をお願いします。

The session for poster presentations is 12:00-13:00 on 21 April (Sun).

Please post your poster in the designated area in room 1305 (3rd floor, building 1), where oral presentations will be made, prior to the session.

## 交通アクセス Access



### 都営地下鉄三田線「白山」駅

- ・ A3 出口から「正門・南門」徒歩 5 分
- ・ A1 出口から「西門」徒歩 5 分

### 都営地下鉄三田線「千石」駅

- ・ A1 出口から「正門・西門」徒歩 8 分

### JR 山手線「巣鴨」駅

- ・ 南口から「正門・西門」徒歩 20 分
- ・ 都営バス 10 分（「浅草寿町」行「東洋大学前」下車）

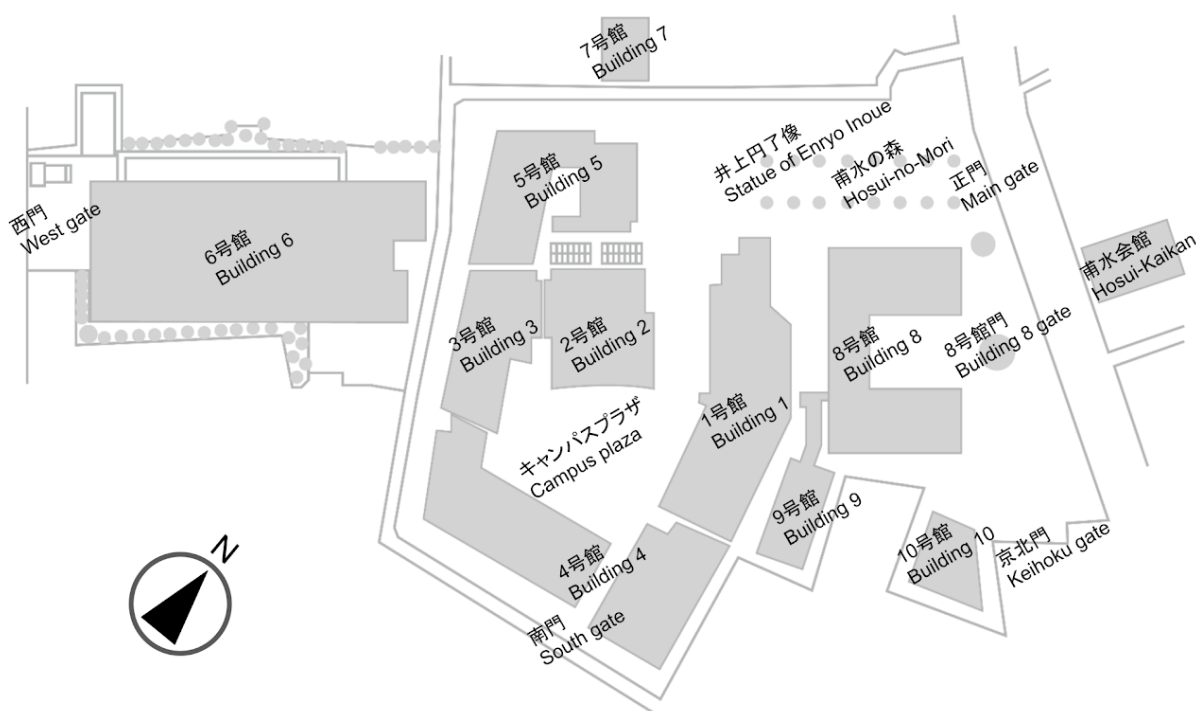
### 東京メトロ南北線「本駒込」駅

- ・ 1 番出口から「正門・南門」徒歩 5 分

### 東京メトロ千代田線「千駄木」駅

- ・ 1 番出口から「正門・南門」徒歩 15 分

## 白山キャンパス Hakusan Campus



- 公開シンポジウム 於 東洋大学白山キャンパス 8号館 7階 125ホール  
8号館門からお入りいただき、8号館のエレベーターで7階にお進みください。
- Public Symposium at 125 hall, 7th floor, building 8, Hakusan Campus, Toyo University  
Please enter through the gate of building 8 and take the elevator of building 8 to the 7th floor.
- 研究発表 於 東洋大学白山キャンパス 1号館 3階 1305教室  
8号館門からお入りいただき、8号館のエレベーターで4階にお進みください。  
8号館4階から1号館3階への渡り廊下がございます。
- Research presentation at room 1305, 3rd floor, building 1, Hakusan Campus, Toyo University  
Please enter from the gate of building 8 and take the elevator to the 4th floor of building 8.  
There is a corridor from the 4th floor of building 8 to the 3rd floor of building 1.
- 21日(日)の休憩室  
5号館 5304教室
- Break room on Sunday, 21st  
Building 5, room 5304

## 第 33 回 日本ナイル・エチオピア学会学術大会・シンポジウム

共催：東洋大学国際共生社会研究センター

### サニテーションと月経をめぐる課題の諸相

#### —沈黙の殻をやぶり動き出した世界—

アジア・アフリカなどの発展途上国において、月経対処は女子教育の阻害要因になっており、たとえばウガンダでは経血が衣服に沁みてしまうことへの心配や恥ずかしさが女子生徒の学校欠席の最大の理由になっている。こうした状況が解決すべき課題として注目を集めるようになり、2010年代にはMHM (Menstrual Hygiene Management) が開発用語として定着して、月経対処を焦点化した開発プロジェクトが増加した(杉田 2016, 2022)。MHM とは、(1) 正確で時機を得た月経に関する知識、(2) 安全で、手ごろな価格で、入手可能な生理用品、(3) (安全で衛生的でプライバシーが確保された) トイレと (手や身体を) 洗うための設備、(4) 生理用品の安全で衛生的な廃棄、(5) 月経に関する知識をもち安心できる教員やヘルスワーカーなどの専門職、(6) 保健サービスへの紹介とアクセス、(7) 月経に関するポジティブな社会規範、(8) 月経に関するアドボカシーと政策、と定義されている (UNESCO 2014)。

月経をめぐるムーブメントは欧米などでも同時に起きた。“period poverty” (生理の貧困) という言葉は日本でもよく知られるようになってきたが、イギリスのマスコミが用いた言葉である。イギリスでは2020年、小学校～高校で生理用品が無償で提供されるようになり、同様の動きは日本の公的機関や教育施設にも急速な広がりを見せている。また“menstrual equity” (生理をめぐる公正)、“menstrual dignity” (月経の尊厳) といった言葉も広まりつつあり、オープンに話すことがタブーとされてきた月経に尊厳をもってむきあう権利が主張されるようになってきている。こうしたムーブメントは、#MeToo などの第4波フェミニズムにも呼応した(杉田 2022)。

月経はいま、世界のあらゆる場所で、沈黙の殻をやぶり、議論されるべきイシューとして立ち現れている。月経をとりまく課題は多岐にわたる。たとえばSDGsに照らして考えれば、少なくとも次の8つと関連付けられる：Goal 1 貧困をなくそう：「生理の貧困」の問題の解消、Goal 3 すべての人に健康と福祉を：月経に関連する健康状況の改善、Goal 4 質の高い教育をみんなに：月経で阻害される教育機会の改善、Goal 5 ジェンダー平等を実現しよう：月経に関連する差別・男女格差の解消、Goal 6 安全な水とトイレを世界中に：生理用品の設置等によるトイレ内環境の向上、Goal 8 働きがいも経済成長も：月経のある人にとっても働きやすい環境の整備、Goal 10 人や国の不平等をなくそう：「生理の貧困」の解消による不平等の是正、Goal 12 つくる責任、つかう責任：生理用品の品質の保証とゴミ問題の諸相の解明である。

本シンポジウムでは、この分野を牽引する研究者と開発実践の専門家が、貧困、教育、ジェンダー、サニテーションなどをキーワードとしたアフリカ、東南アジア、欧米、日本の事例を紹介しながら、月経をとりまく課題を総合的に議論する。

## プログラム Program

4月20日(土) 14:00-16:00

公開シンポジウム Public Symposium

「サニテーションと月経をめぐる課題の諸相—沈黙の殻をやぶり動き出した世界—」



言語：日本語

場所：ハイブリッド（対面式・オンライン）

対面式会場：東洋大学白山キャンパス 8号館 7階 125ホール

オンライン：Zoom 配信（ハイブリッド参加の方はQRコードより参加登録をお願いします）

---

14:00-14:05 開会の挨拶

東洋大学国際共生社会研究センター・副センター長 岡本郁子

14:05-14:10 趣旨説明

中村香子（東洋大学）

---

### 【講演 14:10-15:35】

---

14:10-14:45

1. 山内太郎（北海道大学）

「コミュニティ・サニテーションと月経保健衛生：子どもと地域と研究者の共創」

2. 杉田映理・大阪大学MeWプロジェクト学生メンバー（大阪大学）

「月経の尊厳をめざして：アフリカ、欧米、アジアに広がるボトムアップの活動」

---

14:45-14:55 休憩

---

14:55-15:35

3. 千葉暁子・大門碧（ピースウィングジャパン）\*ケニアよりオンライン発表

「ケニアにおける女性と少女の尊厳を守る月経とサニテーションのプロジェクト」

4. 中村香子・Toyo-MeWプロジェクト学生メンバー（東洋大学）

「東洋大学における月経をとりまく環境の改善を目指す学生主体の取り組み」

---

15:35-15:55 質疑応答・ディスカッション

---

15:55-16:00 閉会の挨拶

---

4月21日(日) 9:20-16:45

研究発表 Presentation

---

9:20-9:30 会長挨拶 Opening Remarks

---

**【第1セッション 1st Session 9:30-10:45】** 座長：佐藤靖明

---

9:30-9:55

- ① 石川博樹「19世紀中葉のエチオピアのショア地方におけるパン文化の変化とその背景」  
(Hiroki Ishikawa, “Study on Changes in Bread Culture and Its Background in the Shewa Region of Ethiopia in the Mid-19th Century”)
- 

9:55-10:20

- ② 下山花「根栽作物エンセーテを主食とする人びとの農業と食にみられる変化：新作物ライコムギを受容したエチオピア南西部ガモ高地の事例」(Hana Shimoyama, “The Change of Agricultural and Dietary Practices in an Enset-Based Community: A Case of the Gamo Highlands, Southwestern Ethiopia after the introduction of triticale in 1970s”)
- 

10:20-10:45

- ③ 吉田早悠里「民族連邦制と国家開発プロジェクト：エチオピアにおける国立コーヒー博物館」(Sayuri Yoshida, “Ethnic Federalism and National Development Project: A Case Study of the National Coffee Museum in Ethiopia”)
- 

**【第2セッション 2nd Session 10:45-12:00】** 座長：宮脇幸生

---

10:45-11:10

- ④ Jacqueline Muthoni Mbugua, Yoshiya Touge, Toshikazu Tanaka, “Preliminary Soil Moisture Measurement in the Upstream of Lake Turkana Basin toward Application of Low-Cost Observation Instruments”
- 

11:10-11:35

- ⑤ 大山修一、島田沢彦、タバレック・イスマイル「ジブチにおける乾燥地農業と廃棄物利用の可能性—下水の処理水と汚泥、ペットボトル、古着の農業利用—」(Shuichi Oyama, Sawahiko Shimada, Tabareck Ismail “Developing a new method of *gudafat* agriculture in Djibouti: Urban waste application for creating agro-pastoral system”)
- 

11:35-12:00

- ⑥ Alula Tesfay Asfha, Rumi Okazaki, Tadesse Girmay, Selam Gebrekiristo, Semhal Tadesse, Mulugeta Fisseha, “3D Documentation Technologies for Preserving Vernacular Architecture in Tigray, Ethiopia”
-



【ポスターセッション Session for Poster Presentation 12:00-13:00】

---

12:00-13:00

ポスター発表 Poster Presentation P①～P⑪

---

- P① 加藤基「エチオピア正教会におけるマリア信仰の婚姻規定への影響：ザルア・ヤアコブのマリア論とマリア奇跡譚の読解から」(Motoi Kato, “The influence of the cult of Mary in Ethiopian Orthodox to their regulation about marriage: Through the analysis of the Mariology of Zar’a Ya’aqob and miracle tales of Mary”)
- 
- P② 遠藤仁、大場千景「エチオピア・オロミア州西ハラルゲ県における中世ハララ関連遺跡の人類学的・考古学的調査」(Hitoshi Endo, Chikage Oba, “Anthropological and Archaeological survey of the Harlaa Medieval sites in West Hararghe zone, Oromia region, Ethiopia”)
- 
- P③ 元木春伽「エチオピア西南部ジンカ市における椅子と女性の作業姿勢」(Haruka Motoki, “Chairs and Women’s Working Posture in Jinka City, Southwestern Ethiopia”)
- 
- P④ 久富颯介、杉山慧、生井沢健斗、朝野太仁、清水郁郎、岡崎瑠美、タデッセ・ギルメイ、ファシル・ギオルギス「アディスアベバ建築遺産へのデジタル計測技術の適応可能性」(Sosuke Hisatomi, Sato Sugiyama, Kento Namaizawa, Taito Asano, Ikuro Shimizu, Rumi Okazaki, Tadesse Girmay, Fasil Giorghis, “Applicability of digital measurement technology to Addis Ababa architectural heritage”)
- 
- P⑤ 生井沢健斗、久富颯介、杉山慧、朝野太仁、清水郁郎、岡崎瑠美、タデッセ・ギルメイ、ファシル・ギオルギス「エチオピアの都市住宅における住みこなし：アディスアベバ・アルメニア人地区を対象として」(Kento Namaizawa, Sosuke Hisatomi, Sato Sugiyama, Taito Asano, Ikuro Shimizu, Rumi Okazaki, Tadesse Girmay, Fasil Giorghis, “Livability of Ethiopian Urban Housing: Case of Armenian District in Addis Ababa”)
- 
- P⑥ 村橋勲「南スーダン、ロピットにおける頭飾りの物質文化：歴史的展開とアイデンティティについて」(Isao Murahashi, “The Material Culture of Headwear among the Lopit in South Sudan: On the Historical Progress and Identity”)
- 
- P⑦ 田中利和、是恒さくら、ウォリソの人びと「Ethio-Tabiの創造に関する実践的地域研究⑧：ともに描き歩むウォリソ産地下足袋の未来」(Toshikazu Tanaka, Sakura Koretsune, Woliso People, “Engaged Area Studies to Creating Ethio-Tabi ⑧: The Future of Woliso Jika-Tabi through Drawing and Walking Together”)
- 
- P⑧ Tadesse Girmay, Rumi Okazaki, Sosuke Hisatomi, Sato Sugiyama, Kento Namaizawa, Taito Asano, Keita Aoshima, Nobuhiro Shimizu, “Urban Redevelopment and Architectural Heritage in Piazza, Addis Ababa: An Overview of What is Happening in the Vicinity”
- 
- P⑨ 田中綾華「創出される気鳴楽器の演奏実践：エチオピア西南部を事例として」(Ayaka Tanaka, “Encouraging the activities of the musical instruments: woyisa in southwestern Ethiopia”)
-

---

P⑩ Satoi Sugiyama, Sosuke Hisatomi, Kento Namaizawa, Taito Asano, Rumi Okazaki, Tadesse Girmay, Keita Aoshima, Nobuhiro Shimizu, “Urban Redevelopment and Architectural Heritage in Piazza, Addis Ababa: Case of Former Residence of Minas Kerbekian”

---

P⑪ Rumi Okazaki, Alula Tesfay Asfha, Tadesse Girmay, Selam Gebrekiro, Semhal Tadesse, Mulugeta Fisseha, “Architectural Heritage of Quien Village: Case of Former Residence of Riese Debri Gebremariam”

---

---

13:00-14:00 昼休み (60分) Lunch Break

---

---

14:00-14:45 総会 General Assembly

---

14:45-15:05 高島賞授与式、受賞者講演 Takashima Prize Award Ceremony

---

15:05-15:10 休憩 (5分) Break

---

**【第3セッション 3rd Session 15:10-16:25】** 座長：児玉由佳

---

15:10-15:35

⑦ 有井晴香「代替養育における結婚交渉にみる親子のあり方：エチオピア西南部マーレの事例から」(Haruka Aarii, “Rethinking Parenthood through Process of Marriage in Foster Families: The Case of Maale, Southwestern Ethiopia”)

---

15:35-16:00

⑧ 森口岳「1980年代におけるJVCアジバル病院の活動について(1)：日本における緊急支援助史とNGO社会史の視点から」(Gaku Moriguchi, “Social History of Japanese Emergency Aid Activities in Ethiopia in the 1980s (1): A Case Study of Ajibar Hospital by the Japan Volunteer Center”)

---

16:00-16:25

⑨ 松原加奈「民族と雇用の論理—エチオピア革靴産業における労働者の事例—」(Kana Matsubara, “The Logic of Ethnicity and Employment: The Case of Laborers in the Ethiopian Leather Shoe Industry”)

---

---

16:25-16:35 最優秀発表賞投票・集計 Voting and Counting for Best Presentation Award

---

16:35-16:45 最優秀発表賞授与式 Best Presentation Award Ceremony

---

16:45-16:50 閉会挨拶 Closing Remarks

---

## 発表要旨 Abstracts

口頭発表

ポスター発表

19 世紀中葉のエチオピアのショア地方におけるパン文化の変化とその背景  
石川博樹（東京外国語大学）

**Study on Changes in Bread Culture and Its Background in the Shewa Region  
of Ethiopia in the Mid-19th Century**

**Hiroki Ishikawa (Tokyo University of Foreign Studies)**

現在のエチオピアの中央部に位置するショア地方 (Šäwa / Shewa) は、1270 年にソロモン朝エチオピア王国発祥の地で、16 世紀までエチオピアのキリスト教徒居住地の中心であった。しかし 16 世紀前半に始まるオロモ (Oromo) の移動の影響で、王国の中心が現在のエチオピアの北西部に移動すると、ショア地方は辺境となった。17 世紀後半、ショア地方のキリスト教徒により、「ショア朝」と呼ばれる地方王朝が創始された。ショア朝の君主たちはソロモン朝エチオピア王国の君主「諸王の王 (Nəguśä nägäst)」に服属しつつ地歩を固め、19 世紀に入るとサフラ・セッラセ (Šahlä Šəllase) (在位 1813~1847 年) が「王 (Nəguś)」を名乗るまでになった。

サフラ・セッラセの下でショア朝が勢力を伸長すると、大英帝国はハリス (W. C. Harris) 率いる使節団をショア地方に派遣した。この使節団のなかで、団長のハリスのほかに団員のグレアム (D. Graham) とバーカー (J. D. Barker) が体験記を残している。ハリスとグレアムは、小麦粉パン「ダッボ (dabbo)」のほかに 8 種類のパンの名称を記録しており、ダッボが富裕層の食べ物であったことを報告している。またバーカーによれば、テフ粉でつくられるパンは民衆の食べ物であった (Barker 1868: 59; Graham 1844: 268; Harris 1844 III: 173)。

拙稿で指摘したとおり (石川 2021; Ishikawa 2023)、1770 年代初頭にソロモン朝エチオピア王国の王都ゴンダール (Gondär / Gondar) を訪れたスコットランド人探検家ブルース (J. Bruce)、および 1843 年から 1846 年にかけてティグライ地方 (Təgray / Tigray) に滞在した英国人探検家のパーキンス (M. Parkyns) の著書からは、「テフ粉でつくられた酸味のあるスポンジ状の平焼きパン」が主要なパンであり、貴族層も好んで食べていたことが窺える。つまり 1840 年代の時点で、エチオピアのキリスト教徒居住地の主要部とショア地方では、パン文化が異なっていた。

1876 年から 1882 年にかけて、ショア地方の都市アンコバル (Ankobär) 近郊で調査を行ったイタリア人博物学者アンティノーリ (O. Antinori) が報告している同地方のパン文化は、ハリス使節団が伝えるものと異なっている。アンティノーリはショア地方のパンについての解説において、まずテフなどの穀類を原料とする「液状生地 (pasta liquida)」でつくられる「インジェラ (əngära / injera)」を取り上げ、次いで「固形生地 (pasta solida)」でつくられる小麦パン「ダッボ」について言及している (Antinori 1879: 393–394)。1880 年代にショア地方を訪れた 2 人のフランス人探検家ソレイエ (P. Soleillet) とボレリ (J. Borelli) も、パンの解説に際し、同様にまず「インジェラ」、次いで「ダッボ」を取り上げている (Borelli 1890: 114; Soleillet 1886: 102–103)。

このようにハリス使節団が帰国の途についた 1843 年から、アンティノーリが到来した 1876 年までの間に、ショア地方のパン文化に変化が見られ、テフ粉を主原料とする液状生地で作る「インジェラ」がダッボと同等、ないしそれ以上に重要な地位を占めるようになっていた。このパン文化の変化の背景として考えられるのが、この間に生じたエチオピアのキリスト教徒居住地の主要部とショア地方との間の交流である。1855 年に即位したテウオドロス 2 世 (Tewodros) (在位

1855～1868年)はそれまで半独立状態にあったショア地方に侵攻し、支配下におさめた。ショア朝の王子で、後にエチオピア帝国の皇帝になるメネリク2世(Menilik / Menelik) (在位1889～1913年)はこの時11歳であった。王都マクダラ(Mäqdälä)に連行されたメネリク2世は、テウオドロス2世に厚遇され、約10年間同地で過ごした。1868年、外交上の軋轢から大英帝国軍の侵入を招き、テウオドロス2世が自殺すると、ティグライ地方の貴族であったヨハンネス4世(Yohānnēs) (在位1872～1889年)が即位した。テウ



オドロス2世治世末にマクダラを脱出してショア地方に戻り、ショア朝の君主となっていたメネリク2世は、ヨハンネス4世に服属の姿勢を見せつつ勢力の伸長に努めた。

テウオドロス2世治世にショア地方がエチオピアのキリスト教徒居住地に再統合されたことが、ショア地方の文化に与えた影響については、管見の限り、これまで十分な研究は行われていない。本発表で明らかにしたショア地方のパン文化の変化はその一端であった可能性が高い。

## 引用文献

- Antinori, Orazio (1879) “Lettere, relazione e note del March. O. Antinori, capo della spezione Italiana,” *Bollettino della Società geografia Italiana, Serie 2* 4: 361–410.
- Barker, James D. (1868) *Narrative of a Journey to Shoa and of an Attempt to Visit Harrar*, Byculla: Education Society’s Press.
- Borelli, Jules (1890) *Éthiopie méridionale: Journal de mon voyages aux pays Amhara, Oromo et Sidama: Setembre 1885 à novembre 1888*, Paris: Ancienne Maison Quantin.
- Graham, Douglas (1844) “Report on the Agricultural and Land Produce of Shoa,” *Journal of the Asiatic Society of Bengal, New Series* 13: 253–296.
- Harris, William Cornwallis (1844) *The Highlands of Ethiopia*, 3 vols., London: Longman, Brown Green and Longmans.
- 石川博樹 (2021) 「16～18世紀のエチオピア北部におけるテフの消費拡大とインジェラの成立」『*農耕の技術と文化*』30: 1-35.
- Ishikawa, Hiroki (2023) “Increase in Teff Consumption in Northern Ethiopia between the 16th and 18th Centuries and the Birth of Injera,” *African Study Monographs. Supplementary Issue* 61: 7–40.
- Soleillet, Paul (1886) *Voyage en Éthiopie (Janvier 1882–Octobre 1884): Notes, lettres & documents divers*, Rouen: Imprimerie de Espérance Cagniard.

根栽作物エンセーテを主食とする人びとの農業と食にみられる変化  
新作物ライコムギを受容したエチオピア南西部ガモ高地の事例  
下山花（日本学術振興会（長崎大学））

**The Change of Agricultural and Dietary Practices in an Enset-Based Community  
A Case of the Gamo Highlands, Southwestern Ethiopia after the introduction of triticale in 1970s  
Hana Shimoyama (JSPS, Nagasaki University)**

エチオピア南西部に位置するガモ高地に暮らす人びとは、新作物ライコムギ（×*Triticosecale* Wittmack）が1970年代に導入されると、ライコムギを既存の農業・食文化に取り込み、ライコムギ導入以前より根付いていたエンセーテ（*Ensete ventricosum*）やオオムギ（*Hordeum vulgare*）、コムギ（*Triticum durum*）の栽培や利用も続けてきた。本研究の目的は、ライコムギの導入前後にみられる農と食の変化を、栽培植物の種類や栽培規模、料理と食材の組み合わせに着目して明らかにすることである。ライコムギの導入を経験した50・60代の農民12名を対象に、作物の栽培状況や、料理に使う材料の頻度と種類についてライコムギ導入前後ごとに聞き取り調査をおこなった。彼らの畑に行き、畑区画ごとに作付け作物の記録とGPSを用いた面積の測定をおこない、8世帯で有効な資料を得た。3年生から12年生の子をもつ33世帯を対象に、食事日記を用いた1週間以上の食事記録をおこない（29世帯で有効な資料を得た）、50・60代に実施したインタビュー結果と比較し、食材と料理の組み合わせにみられる変化の内容を検討した。村の歴史に詳しい人物や農業普及員に話を聞き、ライコムギ導入以前の農作業や栽培植物について情報を収集した。定期市5つにある製粉所の開始時期をそれぞれの所有者に聞いた。

調査地域は標高約2500–2650メートルにあり、平均気温は16.9度、年間降水量は1,410ミリと冷涼で降水量の安定した地域である。人びとは自給的な農業を生業の中心におき、エンセーテからとれる澱粉を発酵させ、酸味を帯びた食材（以下：発酵澱粉）や穀類を組み合わせた食事文化を築いてきた。調査地の農業と食の変化に関して、以下の点が明らかになった。

（1）オオムギやパンコムギ（*Triticum aestivum*）の改良品種が調査村に普及したのは、ライコムギの導入以降であることが普及員や農民への聞き取り調査でわかった。50・60代のインフォーマントへのインタビュー結果より、ライコムギ導入以前は、在来のオオムギとコムギ品種しか栽培しておらず、より広い面積で栽培していたのはオオムギであることがわかった。現在はオオムギやコムギよりもライコムギを広い面積で栽培していると答えた人が11人中8人いた。作付面積を作物別に比較したところ（有効なデータ8世帯）、7世帯がライコムギをほかの作物よりも広い面積で栽培していた。

（2）ライコムギ導入以前の食生活について50・60代のインフォーマントに聞いてみると、オオムギとエンセーテの発酵澱粉を中心の食生活を送り、必要に応じてオオムギあるいはトウモロコシと購入していたと答えた。現在の食生活でよく食べている食材に依然として発酵澱粉とオオムギが含まれるものの、トウモロコシやライコムギが加わる変化がみられた。インフォーマントの全員がトウモロコシを購入していると回答した。彼らによると、トウモロコシを発酵澱粉に混ぜて、発酵澱粉や他の穀類の消費量を抑えたり、穀類の端境期にトウモロコシを購入して料理を作るという。

（3）50・60代のインフォーマントへの聞き取り調査の結果、4種類の料理で材料の種類や頻度に変化がみられた。ライコムギ導入以前には、オオムギと発酵澱粉を利用して4種類の料理を作ると

きに、現在はライコムギやトウモロコシを高頻度で利用すると答えた。29 世帯で得られた食事記録と比較するとインフォーマントの認識通りであることが確認できた。

(4) 50・60 代のインフォーマントへのインタビューの結果、食べる頻度の増減した料理があった。エンセーテの地下茎に近い部分にある柔らかな偽茎を細かく切って調理した料理（チャデ）を食べる頻度が減り、穀類をつかった発酵パン（例えばアムハラ語でインジェラやダボを含む）は、以前は祭日などの限られた場面で食べられていたものの、現在では日常的に食べられ、消費の頻度が増えていることが示唆された。29 世帯の食事調査の結果、調査期間中に 2 世帯のみがチャデを食べ、穀類の発酵パンは、1 世帯を除き 28 世帯で祭日と関係なく 1 回以上食べられており、インフォーマントの認識と一致した。

(5) 農作業の変化を尋ねると、以前は畑の土をひっくり返すように耕し、現在は表層のみを耕していると話した。行政の指導や人口の増加、土地の減少による休閑地の減少も話に出た。耕起方法の変化や休閑地の減少は生産性の低下の一つの原因として考えられている。

(6) ライコムギ導入以前はトウモロコシやオオムギなどの穀類を 2 枚の大きな石と小さな石をつかって家で製粉していた。製粉機の利用は 1991 年以降に定期市で可能となり、現在ではトウモロコシをはじめ穀類を機械で製粉するのが一般的となっている。オオムギやライコムギが少量の場合は現在でも石をつかって製粉することがある。製粉機の登場以降、トウモロコシの購入量が増加したという語りもあった。

調査地は、耕起方法の変化や休閑地の減少による生産性の低下が深刻化する中で、栽培植物の種類が多様化してきた。オオムギと発酵澱粉が中心の食生活に、ライコムギが加わり、さらに以前より頻繁にトウモロコシを購入して食べるようになり、材料の選択肢が増えてきた。オオムギと発酵澱粉を使って作っていた調理法の中には、材料がライコムギやトウモロコシに置き換わってきたものもあり、オオムギや発酵澱粉の利用法に変化が見られた。

民族連邦制と国家開発プロジェクト  
エチオピアにおける国立コーヒー博物館  
吉田 早悠里 (名古屋大学)

**Ethnic Federalism and National Development Project**  
**A Case Study of the National Coffee Museum in Ethiopia**  
**YOSHIDA Sayuri (Nagoya University)**

本発表は、エチオピアのミレニアム・プロジェクトのひとつとして創設された国立コーヒー博物館の事例を取り上げ、その発端と経過、顛末からエチオピアの民族連邦制が抱える歪みと問題点を明らかにするものである。

1991年から民族連邦制をとるエチオピアでは、エチオピア暦2000年を祝い、国家の新しい形を提案するために1年にわたるミレニアム・プロジェクトが2005年から発案、実施された。連邦政府は、このプロジェクトの発案、実施にあたり、ミレニアムの全体目標と戦略として、「エチオピアは貧困をなくし、差異を讃え、平等を尊重する」ことを掲げ、ミレニアム祭典を国内の経済的状況を好転させる機会として位置づけていた。

このミレニアム・プロジェクトでは、エチオピア・ミレニアム祭典国家事務局によって祝賀プロジェクト9件、遺産プロジェクト16件が企画された。そのうちのひとつとして、当時の南部諸民族州カファ県ボンガに国立コーヒー博物館が創設されることになった。世界中に愛好家があり、エチオピアの文化・社会・経済において重要な意味をもつコーヒーに焦点をあてた博物館は、外国人観光客を呼び寄せ、観光セクターの改善と地域ならびにエチオピアの発展にむけた経済的効果を生み出すことが期待された。

カファ県ボンガにて国立コーヒー博物館の建設が始まったのは2007年であり、完成は2008年夏とされていた。しかし、同館の完成・開館がミレニアムに間に合うことはなかった。開館式典が2013年1月30日と31日の2日間にわたって開催されたが、その時でさえも博物館の建物は未完成であり、開館を祝う講演では建物の建設を継続するために新たな予算獲得が必要であることが述べられた。その後、2015年4月14日に博物館は完成したが、2023年12月の時点でも開館するに至っていない。

国立コーヒー博物館の建設と開館が当初の予定から大幅に遅れた要因は、大きくふたつあった。ひとつは、予算の不足、エチオピア通貨の下落といった資金・経済面によるものである。そしてもうひとつは、博物館の管理・運営主体の曖昧さであった。同館の創設はミレニアム・プロジェクトという国家プロジェクトのもとで連邦政府・南部諸民族州政府・カファ県政府が連携する形で進められたが、博物館の管理・運営主体ならびに予算の支出先などをめぐって連邦政府・州政府・県政府の間で折り合いがつかないまま、計画が進められたのである。さらに2021年11月にカファ県が南部諸民族州から南西エチオピア諸民族州へと再編されると、州政府とカファ県の関係性も大きく変化することとなった。2022年8月、国立コーヒー博物館の管理・運営は、ボンガ大学がカファ県の文化観光局を支援する方向で話し合いが進められることになった。

本発表では、国立コーヒー博物館の創設にむけた企画立案、予算、ならびに同博物館の管理・運営主体に焦点を当てながら、大規模な予算を投じた国家プロジェクトが当初の想定通りに進まなかった要因を民族連邦制との関係で論じる。



# **Preliminary Soil Moisture Measurement in the Upstream of Lake Turkana Basin toward Application of Low-Cost Observation Instruments**

**Jacqueline Muthoni Mbugua (Sendai Nika High School)**

**Yoshiya Touge (Kyoto University)**

**Toshikazu Tanaka (The Graduate School of Project Design)**

Ethiopia is the source of several international rivers; therefore, it is an important area for water resource management in neighboring countries. For example, Lake Turkana in northern Kenya is the largest endorheic lake in Africa, and approximately 90% of its river inflow comes from the Omo River, which originates in the Oromia Region of the Ethiopian plateau. In a field survey conducted by the authors in Turkana County in northern Kenya, it was found that flood damage caused by rising water levels in recent years has become serious and that the inflow of inundated water from the lake has led to the deterioration of water quality and a decrease in fish catches. The inability to predict changes in water levels has led to increased damage, according to interviews. Therefore, the authors have been developing a terrestrial water circulation model for Lake Turkana Basin. Using SiBUC, a land surface model that can analyze various land cover conditions in the basin, we estimated the inflow to Lake Turkana based on a water and heat balance analysis for the entire basin and calculated the lake surface evaporation using the water body scheme. Finally, the equilibrium states of endorheic lakes were calculated based on the simulated basin water balance. However, the simulated results of water level changes varied greatly depending on different precipitation dataset input, leading to the conclusion that more hydro-meteorological observations in the region is needed, for more purposes besides improving the accuracy of the hydrological model.

The low density of meteorological observations in developing countries is an important issue in hydrology (Hrachowitz et al. 2013), which is fundamental to study and establishing countermeasures against hydrological disasters. In recent years, the influence of climate change has become more apparent globally, but observations have been conducted non-uniformly and are especially lacking in developing countries. Insufficient observation density delays the response to increasing risks. It also makes it difficult to study the causes of ensuing changes hydrologically and quantitatively in the future. Although Automated weather stations (AWS) can be purchased, installed and are highly accurate and durable, even inexpensive models cost several thousand dollars. This limits the number of stations that can be installed in a region.

Therefore, the authors aim to develop inexpensive automated weather stations for about \$100 by using a 3D printer, whose performance has been improving in recent years, and inexpensive materials that are easily available at nearby stores. Since commercially available AWSs are designed for a variety of environments, they often have high durability that is unnecessary for the environment at the installation site. The development of an inexpensive AWS with slightly lower performance but suitable for local environments could help observations in wide areas. In recent years, IoT technology has diversified the items that can be observed. The ability to select custom-made observation items based on local demand is one of the advantages of making own meteorological instruments.

In this study, as a part of the goals mentioned above, (i) interviews were conducted regarding past dryness hazards to local farmers in Ethiopia; (ii) preliminary observations of soil moisture were performed to verify the accuracy of the hydrological model for Lake Turkana Basin, and (iii) the current status of low-cost instruments that are under development is reported.

First, interviews were conducted in Woliso City, Oromia Region, and the Central Highlands of Ethiopia. The site is located in the uppermost basin of the Omo River, at an altitude of approximately 2000 m, and has a cool climate with an average annual precipitation of 1125 mm. Rainfed agriculture has continued for more than 2,000 years. The area has two rainy seasons per year (February to March: light rain season, June to August: heavy rain season), and wheat, sorghum, corn, teff, ensete, chat, and other crops are cultivated with rainwater, and some of the inner fields are irrigated for chat. Tanaka has stayed in the city since 2007, building relationships with local residents and investigating the state of the local community centered on cattle farming (Tanaka 2018). The interviews were conducted from 29<sup>th</sup> January to 3<sup>rd</sup> February 2020, and were conducted in the local language (Oromo), taking into consideration the local culture.

The most serious drought disaster in Ethiopia occurred in 1985, which is called Saba Saba (meaning 1977 in the Ethiopian calendar). It caused severe damage due to extremely low rainfall from June to August, which was necessary for the growth of sorghum planted in most of the farmlands at the time. Although perennial ensete and other crops survived, the lack of cereals caused damage, especially to children. Local agriculture strongly expects a clear difference between the rainy and dry seasons, and lower rainfall in the rainy season and rainfall in the dry season both cause damage. The drought led the national government to diversify the crop types. Since rainfall was available after the June-August period during the 1985 drought, the aim was to diversify the risk by mixing crops that require rainfall at different times of the year. Although sorghum is popular due to its taste, bird damage was serious and yields were unstable, resulting in a large decrease in the area planted from about 10 years ago until 2021, when the interviews were conducted. Local farmers feel climate change is ongoing, such as an increase in lightning and hailstorms, and an earlier start of the rainy season. The damage caused by the earlier start of the rainy season is limited, but the timing of cattle plowing has changed in recent years. Since lightning and hailstorms are thought to be caused by changes in cumulonimbus convection, atmospheric stability and the atmospheric field at the beginning of the rainy season would be connected.

As an important hydrological component for rainfed agriculture, in situ measurement of soil moisture was performed along the garden side of the Ensete farmland at a depth of 20 cm and at one-hour intervals. Measurements were taken from 31<sup>st</sup> January 2020 to 7<sup>th</sup> May 2022 for 828 days with 19,844 records. The equipment used was a 5TE soil moisture, temperature, and EC sensor connected to an Em50 data logger. The results showed that the onset of the rainy season, which was considered important in the above interviews, was clearly observed; the onset was observed around 17<sup>th</sup> March and 28<sup>th</sup> April in 2020 and 2021, respectively, while it was not observed at the end of the observation period on 7<sup>th</sup> May in 2022. It is important to note that the records were obtained for more than two consecutive years and that the annual changes were clearly captured, including a part of the year 2022, which was a serious drought year.

The results of the hydrological analysis showed that there was little difference in the onset of the rainy season between 2020 and 2021 in terms of soil moisture in the root layer (soil layer 2). The rainfall in the early part of the rainy season in 2020 temporarily increased the soil moisture in the surface layer (soil layer 1). Therefore, it is necessary to modify the treatment of small amounts of rainfall in order to apply the regional hydrological model to rainfed agriculture in the future. The differences between the observation and analysis show the importance of not only the regional hydrological model but also the field observation data.

The development of a low-cost measuring instrument was carried out at a test site in Japan. The electronic part of the instrument consists of a sensor and a data logger. Inexpensive microcontrollers such as Raspberry Pi and Arduino are used for the data logger, which cost only a few thousand yen. The sensor part is also inexpensive, ranging from several hundred to several thousand yen. The housing protecting the electronic components from the outside environment, such as rainfall, etc, was made by a 3D printer and other easily purchased materials. A Raspberry Pi zero WH (about 2000 yen) was used as the microcontroller, which has the minimum functions as a data recorder and a wireless connection system. This time, we developed a storage rain gauge. The storage rain gauge has a simpler structure than the tipping bucket rain gauge, and it is easy to achieve high accuracy with an inexpensive measuring device. A load cell sensor is used to measure the weight of stored water. For the housing, we used inexpensive materials such as wood and trash boxes. Test observations were conducted in Uji City in February 2023. As a result, continuous observation was achieved without being broken during a rainfall event. The measured rainfall was underestimated compared to the AMeDAS data, but it would be due to the distance between observation locations; since the storage rain gauge only measures the weight, the factors that affect the accuracy should be small. We are currently working to improve the durability of low-cost instruments, but current low-cost instruments are often less durable than commercially available instruments; therefore it requires management based on cooperation with the local community as practical hydro-meteorological observations.

ジブチにおける乾燥地農業と廃棄物利用の可能性  
—下水の処理水と汚泥、ペットボトル、古着の農業利用—  
大山修一（総合地球環境学研究所/京都大学）、島田沢彦（東京農業大学）、  
タバレック・イスマイル（ジブチ農業省）

**Developing a new method of *gudafat* agriculture in Djibouti:  
Urban waste application for creating agro-pastoral system**  
**Oyama Shuichi (Research Institute for Humanity and Nature/ Kyoto University),  
Shimada Sawahiko (Tokyo University of Agriculture), and Tabareck Ismail (Ministry of  
Agriculture, Djibouti)**

アフリカやアジア、ラテンアメリカ、中東の乾燥・半乾燥地では都市の下水、または下水処理水を農業灌漑に使用することが増加している (Hoogendijk et al., 2023)。2008 年の時点で集計されたデータによると、世界では 39 都市で下水がフォーマル/インフォーマルに利用されており、利用する農家は 108 万 8050 世帯、その灌漑農地は 39 万 6740 ヘクタールという推計がある。そのうち、アフリカでは 9 都市で下水が農業に使用されており、3550 世帯が 5100 ヘクタールの農地に灌漑している。乾燥・半乾燥地における農業生産のために用水は重要であり、その水源として都市の下水が利用されている。

下水の化学的な特性として、強い酸性はパイプやスプリンクラーの腐食を引き起こすこと、逆に強いアルカリは植物生育の不良や有害重金属の混入を懸念する必要がある。EC（電気伝導度）によって塩分濃度をモニタリングしたり、汚濁の原因となる有機物の量を化学的酸素消費量（COD）や生物化学的酸素消費量（BOD）によって把握する必要がある。また、農地の灌漑用水として使用する場合には、植物の三大元素である窒素やリン酸、カリウムの含有量も重要な指標となる。

東アフリカのジブチ共和国は紅海に面した国であり、首都のジブチ市はアデン湾に面している。年間降水量は 163mm ときわめて少なく、雨季と乾季が不明瞭で、いつ雨が降るのか規則性がないという特徴がある。年間平均気温は 29.9℃で、7 月と 8 月の月平均気温は 36℃を越えて酷暑であり、もっとも低い 1 月の平均気温は 25.1℃である。典型的な砂漠気候（BW）であり、乾燥がきわめて厳しい。

ジブチは内陸国エチオピアとの中継貿易がさかんであるほか、地政学的に重要な位置を占めており、フランスやアメリカ、イタリア、中国、日本などが海外基地を建設し、多額の援助が集まる。2019 年の推計でジブチ市の人口は 61 万 9900 で、都市の中心部から南へ 10km の距離にあるドゥダという地区には廃棄物積み上げ場と下水処理場がある。下水処理場は 2017 年に EU の援助で建設され、曝気槽と沈殿槽、それに沈殿した汚泥を天日乾燥させる脱水・乾燥槽がある。天日乾燥によって脱水・乾燥させるのは、降水が少なく、乾燥の強いジブチならではの。下水処理量は 2000m<sup>3</sup>/日である。

この処理水の大部分は紅海へ放流されているが、一部が EU とアメリカの援助で建設された農場へポンプで送水され、農業灌漑として利用されている。2017 年に 40 区画の農場が建設され、1 区画の大きさは南北 50m x 東西 100m、0.5 ヘクタールが基本である。1 区画のなかには 10m x 50m の大きさのネットハウスがあり、日射を遮ることができる。2024 年 3 月時点では 48 区画に増えている。

筆者らは 2019 年にジブチ農業省の協力を得て、JICA/JST SATREPS プロジェクト（東京農業大学）の一環で 100m 四方の農場を建設した。1 区画の農場に対して、灌漑用水は 2 日に 1 度、2 時間にわた

って均等に供給されることになっている。1 度の供給量は 2100L ということになるが、送水ポンプの不調が頻発し、4 日に一度の配水や、ときに 10 日間にわたって断水しつづけることもある。

ジブチ市における中心市街地の水道水（2020 年 2 月 17 日、水温 31.1℃）は、pH が 7.7、硝酸態窒素が 10 mg/L、EC が 6.79 mS/cm、塩素が 1900 mg/L、全炭素 <0.3 mg/L、大腸菌・大腸菌群は未検出であった。EC、つまり塩分濃度がきわめて高く、日本の水道法の基準では塩素イオンの量がオーバーしている。水道水を口にふくむと、塩からさが感じられる。ジブチの地下水は、海水または、地下で湧出する塩分の影響を受けている（Asakura et al., 2023）。このような水道水が市内で使用され、下水となって処理場に流入する。下水処理水(2020 年 2 月 18 日採水)では pH 7.7、硝酸態窒素は 74mg/L、EC は 5.61mS/cm、浮遊物質 (SS) は 46mg/L、COD は 41mg/L、BOD は 40mg/L、大腸菌群は 290,000 CFU/cm<sup>3</sup>、銅や亜鉛、クロムは 0.05mg/L 未満、鉛は 0.01mg/L 未満であった。この下水処理水が灌漑用水となる。

ジブチ社会ではナツメヤシに高い文化的な価値が置かれ、日常生活やラマダンどきにナツメヤシがよく食べられる（Daher et al., 2015）。農業試験場ではナツメヤシの栽培とヤギの放牧を組み合わせた農牧複合がみられるが、1 本のナツメヤシを栽培するには 1 日に 125L の水を必要とし、大量の灌漑用水を必要とする（Hami Said Ahmed and Yves Coquet 2018）。植え付けから収穫まで最低 5 年はかかるため、ナツメヤシを栽培するのは 30 区画（62.5%）にとどまり、その本数は 1~4 本であった。

筆者らは 2020 年 2 月にナツメヤシの苗木 15 株を植え付けた。植え付け後に、3 株の苗木が乾燥、または根腐れで枯死した。ジブチの人びとがおこなう慣例灌水区と、ジブチのゴミ捨て場でよくみられるペットボトルを利用した灌水区の土壤水分の比較をおこなった。ジブチの人びとがナツメヤシを栽培するとき、直径 200cm、深さ 1m ほどの土壌を掘り起こしたうえで、80cm ほどを埋め戻して深さ 20cm のお盆状にし、その中心部に株を植え付ける。灌水ときには、ホースをお盆状の地面に置き、5 分間ほどで 90~100 リットルの水を入れる。乾燥した土壌に水を入れても、水はすばやく浸透せず、水位は上昇しつづけ、地面をつたい水平方向に移動する。この水は利用されることなく、蒸発する。

灌水の有効利用と節水を目的とし、ペットボトルを使った灌水と古着によるマルチを利用したナツメヤシ栽培を試みている。ジブチ市民のなかには、塩分濃度の高い水を避け、飲料用に 2L もしくは 1.5L のペットボトルの水を購入する人が多い。廃棄されたペットボトルの口と底をはさみで切り、底の部分に布をあてて、ナツメヤシの株から 40cm に円形に 15~20 本のペットボトルを埋設する。株の生長にあわせて、ペットボトルの本数を増やす。また、多く捨てられている古着をマルチに利用し、土壤水分の蒸発をふせぐ。腰布やスカーフ、T シャツ、ジーンズ、カーテン、礼拝用のじゅうたん、タオルのほか、軍服や船員用のライフジャケット、寝袋などが捨てられているのもジブチらしい。

慣例区では、灌水のたびに地表面が攪拌されて細かな粒子の粘土（ソマリ語 *dogo*）が浮き上がり、その後、地表面が乾燥する結果、厚さ 2mm ほどの薄いクラストが形成される。クラストによって水は地中にすばやく浸透せず、一部は水平方向に移動することで、水分のロスが大きくなる。一方、ペットボトルを通じて灌水すると、深さ 20cm から根にむかって注水でき、しかも、地表面に敷いた古着のマルチによって土壤水分の蒸発が抑制され、長時間にわたって水分が保持されることが明らかとなった。

廃棄物の利用には注意点があることも指摘しておきたい。ドゥダの農場では 42 区画（87.5%）でメロンが栽培されており、肥料として下水汚泥が利用されている。日本の下水汚泥の利用基準は、100 年連続で施用しても汚染濃度を超えないという厳しいものである。ジブチの下水汚泥ではヒ素やカドミウム、ニッケル、クロム、鉛の含有量は基準未満であったが、水銀は日本の基準（2mg/kg）を越えていた（3.4mg/kg）。また、窒素は 2.7%、リンは 3.6%であるが、カリウムは 0.5%と低いのも特徴である。

## **Leveraging 3D Documentation Technologies for Preserving Vernacular Architecture in Tigray, Ethiopia**

**Alula Tesfay Asfha<sup>1</sup>, Rumi Okazaki<sup>2</sup>, Tadesse Girmay<sup>3</sup>, Selam Gebrekiristo<sup>4</sup>,  
Semhal Tadesse<sup>5</sup>, Mulugeta Fisseha<sup>6</sup>**

In the Tigray region of Ethiopia, preserving cultural heritage amidst challenges such as conflict, development pressures, socio-economic issues, resource limitations, legal and regulatory issues, lack of awareness and education, and environmental degradation has become a paramount concern. The rapid transformation of the heritage landscape, particularly the loss of architectural heritage, underscores the urgent need for effective preservation strategies. While still very useful, traditional documentation methods such as measurement, drawing, photography, and written documentation have proven to be time-consuming and expensive, making them inadequate for addressing the scale and pace of change.

The study conducted field surveys of cultural heritage sites in the Tigray region between January and February 2024, exploring the application of 3D documentation technologies at sites including Cheleqot, Wukro, Nejashi, Quien, Mekelle, and Agulae. This presentation proposes a shift towards leveraging advanced technologies, specifically 3D documentation technologies, for the documentation of cultural heritage sites. These technologies offer the advantage of rapid data collection and processing, requiring limited but highly skilled professionals, thus significantly reducing time and cost barriers.

The presentation will highlight the lessons learned from the field survey, including the efficacy of these technologies in capturing detailed site data and facilitating comprehensive documentation. Furthermore, recommendations will be provided for integrating 3D documentation technologies into heritage documentation practices. This includes the implementation of capacity building programs aimed at empowering local stakeholders with the necessary skills to utilize these technologies effectively. Additionally, fostering collaboration among heritage experts, technology developers, and community members is emphasized as a means to ensure comprehensive and sustainable heritage preservation efforts.

---

<sup>1</sup> Goethe University Frankfurt/Mekelle University

<sup>2</sup> Shibaura Institute of Technology, Japan

<sup>3</sup> Ethiopian Institute of Architecture, Building and Construction

<sup>4</sup> Mekelle University

<sup>5</sup> Mekelle University

<sup>6</sup> Adigrat University

代替養育における結婚交渉にみる親子のあり方  
エチオピア西南部マーレの事例から  
有井 晴香（北海道教育大学）

**Rethinking Parenthood through Process of Marriage in Foster Families**  
**The Case of Maale, Southwestern Ethiopia**  
**ARII Haruka (Hokkaido University of Education)**

エチオピア西南部に暮らす少数民族マーレの社会において、子が育つ世帯を移動することはさまざまな背景のもと、活発におこなわれている。広くアフリカ社会でみられる拡大家族を中心とした子の養育システムにおいて、親と子の関係性は必ずしも一対に限られたものではなく、親子関係の複数性に注目した研究もなされてきた。

本報告では、複数の親子関係がみられるような状況において、どのように親子の関係性や役割が表出するのか、とくに子の結婚をめぐる交渉事例に着目する。エチオピア西南部マーレにおいて出自が異なる子の代替養育を担ってきた事例をとりあげ、養育していた子の結婚プロセスにおいて、「親」としての位置づけ・役割がどのように解釈されていたのかについて検討することを目的とする。複数の親子関係が見出されるような状況において、子の結婚に関係する権限がどのように交渉されているのかに焦点をあてる。本報告では、父親を亡くし母方の親族に引き取られ養育された子、特定の禁忌に触れ親族関係に全くない世帯で養育された子、送り出し世帯あるいは引き取り世帯の事情によって養育された子の結婚事例について取り上げる。なお、本発表で扱うおもなデータは2023年8月から9月にかけて実施した調査にもとづいている。

マーレは夫方居住の父系社会であり、結婚に関わるプロセスのさまざまな場面において、夫婦の「親」および「親族」は大きく関わっている。本発表では、とくに女性が結婚に際して移動する際の拠点となる家、および結婚後の謝罪と婚資交渉をめぐる権限に注目して、養育者が「親」としての役割を担うことへの期待がありながらも、必ずしもそうはならない実態について報告する。

現在のマーレにおける結婚方法として、親の承諾を得た上でエピ (*epi*) と呼ばれる結婚式をおこなうか、妻が家族には告げずに夫の家へと移動する駆け落ちの形かがもっとも多くとられる形である。いずれの方法をとるにせよ、妻となる女性は嫁ぐ際には「父親」の家から移動することが想定されている。社会的に規定された実親とは異なる世帯において代替養育を受けた女性が嫁ぐ場合、当事者女性の選択によって実親の家と育親の家のどちらから嫁ぐかが決定されていた。ただしこの決定は時に「親」とのもめごとに発展しうるものであった。

また、駆け落ち婚の場合、女性が嫁いだ翌朝に、カイジョ (*qaijo*) と呼ばれる仲介者が女性の父親の家に送られ、謝罪と婚資の相談がおこなわれる。ここで、謝罪は女性の親族に対してもおこなわれるべきとされ、謝罪をおこなう家については父親が指示することとなる。どの範囲の親族に対しておこなうかは父親の裁量次第によるが、基本的には同一リーネージの人、および母親の親族に対してもおこなわれる。代替養育を受けた男性がカイジョを送る場合、実親と育親のどちらがカイジョを送るのか、また代替養育を受けた女性に対してカイジョが送られる場合、まず実親と育親のどちらに送られ、またその後の謝罪の対象となる親族の範囲をどのように捉えるかについても、解釈の相違がみられた。

## 1980年代における JVC アジバール病院の活動について（1）

日本における緊急支援史と NGO 社会史の視点から

森口 岳（東洋大学 人間科学総合研究所）

### Social History of Japanese Emergency Aid Activities in Ethiopia in the 1980s (1)

A Case Study of Ajibar Hospital by the Japan Volunteer Center

Gaku Moriguchi (Institute of Human Sciences, Toyo University)

エチオピア、アムハラ州南ウォロ県にあるデセ（Dessie）から、さらに車で 120km ほど離れた場所にアジバールという町があり、1980 年代に日本の NGO である日本国際ボランティアセンター（Japan Volunteer Center、以下 JVC）とシェア-国際保健市民の会-（以下 SHARE）が、当時のエチオピア飢饉（1983-85）への対応を行うかたちで病院を建設し、緊急支援活動を行った。なおエチオピア飢饉は BBC での報道を端緒に世界的な注目を浴び、俗にいう「ライブ・エイド運動」として 1980 年代半ばの援助状況を彩るものとなる（榎本 2006）。また日本でも日本テレビ「24 時間テレビ『愛は地球を救う』」（シリーズの中でも 8 回目）においても、エチオピアの飢饉の状況は報道され、エチオピアをはじめとするアフリカ、アジア各諸国への緊急支援は耳目を集め、かつ活況を呈するものとなった。

本研究は、そのような華々しい報道状況の影で、実際にどのような緊急支援状況があり、かつ当時の日本の NGO 活動がどのような歴史（開発援助史・日本 - アフリカ交流史）的文脈の中で位置づけられるのかの考察を試みるものとしてある。なお、昨年度から得た科研基盤研究（C）「1980 年代の JVC アジバール病院をめぐる援助社会史と民族誌的研究」（2023-2025）による調査を基に行う研究発表のため、複数回にわたって発表を行っていききたい。

日本の開発援助史は ODA（政府間援助）関連で語られる傾向が強く（下村 2020, 佐藤 2021）、70 年代からの民間 NGO からの国際援助については、各団体内での個別の記録のみが断片的に残されるのみである（cf. シャプラニール 1989, 1993）。一方で、当時（70～80 年代）の日本の NGO による海外援助活動を行った多くのスタッフは、その活動を終えた後に専門性を買われ、国連職員、JICA 専門員、開発コンサルタント職員など、国際協力の中心、もしくは日本の海外事業の広い裾野を担うかたちで活動し、団体内／世代内で共有されていた思想（主に当時の学生運動などに拠っている）などからも、日本の国際協力史において大きな影響を与えている。

アジバール病院での活動は当時のプロジェクト従事者であった JVC、および SHARE の元メンバーたちによって、その当時のエチオピアの様子も併せて記録が残されている（JVC・SHARE 記録編集委員会 1988）。今回の発表では、そうした記録を基にしながらか、当時の活動メンバーらのインタビューおよび現地スタッフらの証言を検討し、当時の社会史的な状況を明らかにしていきたい。

参考文献：榎本珠良（2006）「ライブ・エイドからライブ 8 へ：20 年後のアフリカ・イメージ」『アフリカレポート』42: 33-39. / 佐藤仁（2021）『開発協力のつくられ方: 自立と依存の生態史』東京大学出版会. / シャプラニール（1989）『シャプラニールの熱い風』めこん. / （1993）『シャプラニールの熱い風<第 2 部>』めこん. / JVC・SHARE 記録編集委員会（1988）『JVC アジバール病院—エチオピア緊急医療救援報告』連合出版. / 下村恭民（2020）『日本型開発協力の形成 政策史 1：1980 年代まで』東京大学出版会.

## 民族と雇用の論理

### —エチオピア革靴産業における労働者の事例—

松原 加奈（東京理科大学経営学部）

## The Logic of Ethnicity and Employment

### The Case of Laborers in the Ethiopian Leather Shoe Industry

Kana Matsubara (School of Management, Tokyo University of Science)

エチオピアの皮革産業は、家畜保有数が多いことから、原料である原皮を豊富に採取できる。そして、その原皮から最終製品である革靴、革鞆、レザージャケット等の革製品まで一貫したサプライチェーンを持つ国内産業のひとつである。それを背景とし、同国政府も皮革産業を支援対象産業のひとつとしている。ただ、近年のエチオピアの皮革産業は悪い意味で大きく変容した。

報告者は皮革産業のサプライチェーンのなかで最終製品を生産する革靴産業を主に対象とし、企業が多く所在するアジスアベバを調査地とした。調査対象企業は革靴を製造する地場企業6社（小企業2社、中企業2社、大企業2社）である。

本発表は二部構成で展開される。まず、第一部では、新型コロナウイルス蔓延前後で皮革産業の状況がどのように変容したかを明らかにすることを目的とする。結果として、新型コロナウイルス後は、以下の4点が皮革産業の低迷を招いた。①外貨不足、②ティグライ州とアムハラ州・オロミア州の内戦による内需の変化、③内戦による外資系企業の撤退と特惠待遇の撤廃、④急速なインフレーションによる材料費の高騰が起きた。これらにより、皮革産業の現地企業は大打撃を受け、倒産や閉業に追いやられている。

第二部では、エチオピアの皮革産業は国内の政情不安と経済低迷に連動して不安定になっており、同国では政治・行政をめぐる利権の奪い合いも起きているなか、労働者間の関係がそれに連動して不安定にならないのかを明らかにすることを目的とする。結果として、インフレーションに伴った賃上げは起きておらず、実質賃金は下がっている。労働者は今まで以上の生活苦に直面している。そのなかでも、労働者はここ数年の政府官庁における特定民族の優遇とは全く別の論理で職を見つけ、賃金を上げるために転職をすることが明らかになった。彼らは技能や職歴から、入職をしていた。民族や親族といった属性はブルーカラーの労働市場内では機能しなくなると考えられる。



エチオピア正教会におけるマリア信仰の婚姻規定への影響  
ザルア・ヤアコブのマリア論とマリア奇跡譚の読解から  
加藤基 (東京大学)

**The influence of the cult of Mary in Ethiopian Orthodox to their regulation about marriage**

**Through the analysis of the Mariology of Zar'a Ya'aqob and miracle tales of Mary**

**Motoi Kato (University of Tokyo)**

エチオピア正教会に対する研究の中で、聖母マリアに対する信仰は、マリアに関する祭日やイコンの多さなどから特筆すべきものとして扱われてきた。マリアに対する信仰は、国家の政策や民衆の宗教観や価値観を反映したのものとして分析が行われている。本報告が取り上げるのは、エチオピア正教会文化圏で行われるマリア信仰が、婚姻の慣習をどのように取り扱っていたかという問いである。

報告者は、複数の妻を持つという慣習と一人の妻を持つことを命じるエチオピア正教会の規定の間の関係に関心を持ち研究を行ってきた。16世紀のエチオピア北部では、複数の妻を持つ慣習があることがヨーロッパからエチオピアへ訪れた宣教師によって報告されている。一方で、聖人伝や教会に関わる法律では貞節という価値観が強く表明され、複数の人間と関係を持つことは姦淫として強い非難の対象となっている。報告者が関心を持つのは、この二つがどのような関係を持ち、その関係がどのように歴史的に変遷したかである。

本報告は、この関心に則って14世紀から16世紀におけるエチオピア正教会のマリア信仰について取り上げる。まず、エチオピア正教会におけるマリア信仰は、民衆の、特に周縁化されやすい女性の、周縁化され、文字資料の残らない人々の宗教的価値観を反映するものとして関心を集めてきた。したがって、婚姻の慣習に関する価値観を読み取ることも可能であると考えられる。

それと同時にマリア信仰は国家とも関わりを持つ。中でも14世紀から16世紀は、エチオピア正教会のマリア信仰におけるターニングポイントの一つである。ダウイト2世(在位1379/80-1413)によるマリアに関わる奇跡譚『タアムラ・マルヤム(Tä'ammärä Maryam)』のアラビア語からの翻訳とザルア・ヤアコブによるマリアの祭日儀礼と祭壇の設置の義務化という、王からのマリア信仰の活性化が行われた。したがって、民衆によって行われる慣習と国家や教会が定める規定という二つの関係を検証する論点として、14世紀から16世紀のマリア信仰は興味深い題材である。

本報告では、主に二つの史料の検証を行う。まず、マリアに関する奇跡譚として、ダブラ・ザマド修道院に所蔵されていたマリア奇跡譚の中の婚姻に関する問題の事例を検証する。次に、これらの描写の背景に、エチオピア正教会のマリア論がどの程度影響したかを、ザルア・ヤアコブが示したマリアに関する説教「ラウヤ・タアムル(Ra'äyā Tä'ammär, ራእየ ተአምር)」の読解を通して検証する。

エチオピア・オロミア州西ハラルゲ県における中世ハララ関連遺跡の  
人類学的・考古学的調査  
遠藤 仁（大東文化大学）、大場 千景（アルシ大学）

**Anthropological and Archaeological survey of the Harlaa Medieval sites  
in West Hararghe zone, Oromia region, Ethiopia**  
Hitoshi Endo (Daito Bunka University), Chikage Oba (Arsi University)

エチオピアを含む東アフリカ一帯は、東・南・西アジア地域と地中海沿岸地域を結ぶインド洋航路の中継地点として、古代から流通の一端を担ってきた。内陸部であるエチオピア高原もその交易路の一部であり、交易を担う様々な集団がいたことが知られている。

本研究の目的は、中世期にエチオピア南東部で隆盛を極めたが、現在はほとんど同地域に存在しないハララと呼ばれるイスラーム民族集団の動向を探ることである。ハララの人々は、エチオピア南東部に、6世紀半ばから15世紀初頭にかけていくつかの拠点を中心に散在していたとされ、この時期にエチオピアで広まったイスラームを伝えた集団の1つであり、インド洋航路を利用した中世貿易網の一端を担っていたとされる (Pryor *et al.* 2020)。彼らに関しては、唯一の発掘事例である Harlaa 遺跡から年代が推定され、その集落跡からは、モスクや、住居址、墓などの遺構のほか、土器、ビーズ、子安貝など様々な出土品も見つかり、同遺跡が中世の貿易拠点であったことが考古学的に確認されている (図1、Insoll *et al.* 2021)。

本研究の手法としては、現在同地域に居住するオロモ語系諸集団を対象とし、複数地域から収集した口頭伝承や歴史、社会人類学的データを比較分析することで導き出された「仮説的歴史」を、最新の考古学的、分子生物学・生化学的知見と共に検証しながら、歴史叙述を行うことである。ハララはオロモの口頭伝承では、中世に「天災」による人口激減により去ったという。先行研究では言及されていない、ハララの人々がエチオピア南東部から減少、もしくは移動した理由と推測される「天災」とは一体何であったのかを、調査を通じて明らかにすることを最終的な目的としている。調査地として、オロミア州西ハラルゲ県を対象とし、2023年8月の予備調査では発掘調査地選定のために、オロミア州文化局 (Oromia Culture and Tourism Bureau) の協力のもと、3カ所の遺跡を踏査し、簡易測量および遺物の表面採集を行った。踏査した遺跡は、オロミア州文化局に把握されている2遺跡 (Mosqida Harlaa Hula Dhoora 遺跡および、Kaburi Harlaa Didibiftuu 遺跡) と、今回の踏査により新規に確認された1遺跡 (Mosqida Harlaa Sakate 遺跡) である (図1、以下、下線部分のみで呼称)。

調査の結果、モスクや建造物、墓などのほか、土器片や石製ビーズなどいくつかのハララのものと考えられる痕跡を見つけることができた。その中でも新規確認された Sakate 遺跡で発見した、1辺52mの正方形の周壁に囲まれた、1辺30mの正方形のモスクは特筆に値するものであった (図2)。このモスクは、周辺の村人にのみ断片的に認識され、オロミア州文化局の現地担当者ですら知られていない巨大な構造物であった。モスク周辺には墓や住居址、貯水池、集落域を囲う数 km におよぶ周壁などの遺構も確認することができ、都市もしくは町と呼べる規模であることが確認できた。このモスクや周辺の遺構の年代は明確ではないが表面採集された土器や墓の様式から10~15世紀と推定できる。モスクの規模は中世のエチオピアのモスクの内、遺構が確認できるものの多くが1辺10m前後

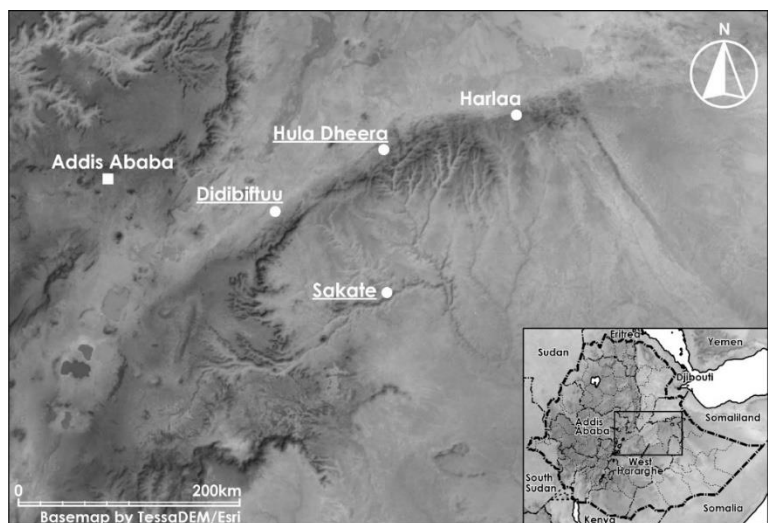


図1 中世ハララ関連遺跡 (下線が踏査遺跡、筆者作成)

の規模（Cornax-Gómez & Rodríguez 2013）であり、貿易拠点とされる Harlaa 遺跡のモスクも 9.3×7.4m（Insoll *et al.* 2016）であり、Sakate 遺跡のモスクの規模は隔絶している。その他は、Hula Dhoora 遺跡は 1 辺 12m のモスクと墓が数基確認され、エチオピア南東部でいくつか認識されているハルラ関連遺跡の典型的な遺跡である。Didibiftuu 遺跡は数百基におよぶ複数の墓群が確認され、今後発掘が行えた場合、人骨の DNA 分析からハルラの人々の出自や、彼らを襲ったとされる「天災」の候補の 1 つである何らかの伝染病（現時点では黒死病／ペストを想定）を特定できる可能性がある。

いずれの遺跡も短期間の簡易調査であるものの、ハルラの人々の動向の一端を明らかにすることができる可能性を秘めた遺跡であることが確認できた。今後、発掘を伴うより詳細な調査や、出土品の科学分析を含む複合的な調査を計画している。

### 参考文献

- Cornax-Gómez, C and J. de T. Rodríguez 2013 “Urban mosques in the Horn of Africa during the medieval period”, *Ethiopian Islam* 153: 37-67.
- Insoll, T., R. MacLean and B. Engda 2016 “Archaeological Survey and Excavations, Harlaa, Dire Dawa Regional State, Ethiopia, October 2016, Fieldwork Report”, *NYAME AKUMA* 85: 23-32.
- Insoll, T., N. Khalaf, R. MacLean and D. Zerihun 2017 “ETHIOPIA Archaeological Survey and Excavations, Harlaa, Dire Dawa, Ethiopia January-February 2017. A Preliminary Fieldwork Report”, *Nyame Akuma* 87: 32-38.
- Pryor, A.J.E., T. Insoll and L. Evis 2020 “Laser ablation strontium isotope analysis of human remains from Harlaa and Sofi, eastern Ethiopia, and the implications for Islamisation and mobility”, *Science & Technology of Archaeological Research* 6(1): 113-136.

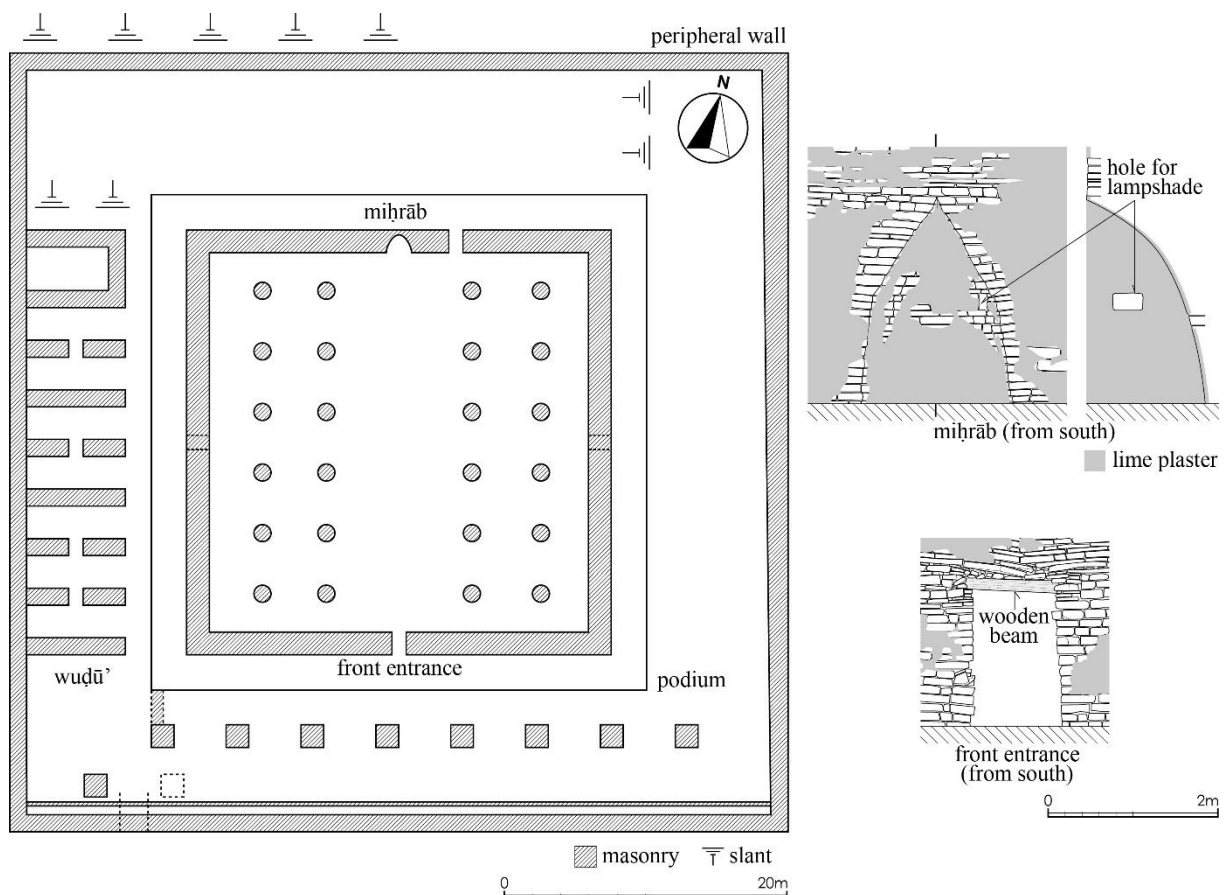


図2 Mosqida Harlaa Sakate 遺跡のモスク測量図（筆者作成）

エチオピア西南部ジンカ市における椅子と女性の作業姿勢  
元木春伽（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

**Chairs and Women's Working Posture in Jinka City, Southwestern Ethiopia**  
**Haruka Motoki (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)**

本発表の目的は、2023年9月に実施した予備調査をもとに、エチオピア西南部ジンカ市に暮らす20-30代のアリの女性を中心に、日常生活で利用していた椅子の分類と形態的な特徴、家事労働における女性の作業姿勢を明らかにすることである。発表者は、エチオピア西南部にあるジンカ市T地区にて、8世帯で20-30代の既婚女性を対象に、2023年9月から12月までの計48日間の予備調査を実施した。

予備調査の結果、以下の5点が明らかになった。1. 女性たちは利用していた椅子を4種類の名称で分類していた。4種類の名称は、バルチマ(*barichima*、アリ語)、ゴムムラ(*gomila*、アリ語)、ウォンバル(*weniberi*、アムハラ語)、ソファーである。2. どの世帯も2種類以上の椅子を所有していた。3. 椅子の形態についての観察と計測データによれば、(1)バルチマ(写真1)は、座面と座面を支える3本の脚で構成されていた。釘などを使わず1本の丸太から掘り出して製作されていた。地面から座面までの高さは、23.5-35cmであった。(2)ゴムムラ(写真2)は、座面と座面を支える2本の脚で構成されていた。3枚の木板をコの字型にして釘で固定して製作されていた。地面からの座面までの高さは、13-23.5cmであった。(3)ウォンバルは、座面と背もたれ、座面を支える4本の脚で構成されている椅子と、同じ構成で背もたれがない椅子の2種類があった。木材やプラスチックで製作されていた。地面から座面までの高さは、34.5-49cmであった。(4)ソファーは、座面、背もたれ、肘置きと座面を支える4つ脚(キャスター付き)で構成されていた。地面から座面までの高さは、37-48cmであった。4. 8世帯の夫人からの聞き取りによれば、7世帯の夫人は、所有する椅子をそれぞれの名称で呼び分けていた。一方で、1つの世帯の夫人は、所有する2種類の椅子をどちらも、ウォンバル(アムハラ語で椅子の意味)と呼んでいた。

5. 8世帯の夫人に対して、平日の9-13時の間(合計112時間/29日)、彼女たちの行動を直接観察した。その結果、(1)彼女たちの行動を、1)調理、2)育児、3)社交、4)その他の4つに分類した。それぞれの行動における作業姿勢と現地語名を検討したところ、1)座る、2)胡坐、3)足を伸ばして座る、4)深前屈、5)しゃがむ、6)両膝をつくの6つに分類でき、アリ語名で呼び分けられていた。(2)6種類の作業姿勢のうち、5種類の作業姿勢は腰の位置が地面から約25cm以下のところであった。彼女たちは作業をする際、バルチマとゴムムラのみを使っていた。(3)調査世帯の中には、土台を作って竈の位置を高くしている世帯(写真3)とそのような対応をしていない世帯(写真4)があった。地面から高い位置に竈を作っている場合、その高さは23-45.5cmであった。竈を高い位置にしている世帯の夫人が調理時に座っていた時間は約70分間であった。一方で、地面に竈を作っている世帯の夫人が調理時に座っていた時間は約35分間であった。

今回の予備調査では、ジンカ市に居住する20-30代の既婚女性が、調理等を行う際、地面から50cmまでの垂直空間において作業を行なっていることが明らかになった。今後予定している本調査では、エチオピア西南部にある農村部の同性代の女性や都市部に暮らす40代以上の女性を対象に椅子の利用や作業姿勢についてフィールドワークをおこなう。



写真1：バルチマ



写真2：ゴムムラ



写真3：竈(土台あり)



写真4：竈(土台なし)

アディスアベバ建築遺産へのデジタル計測技術の適応可能性  
久富颯介、杉山慧、生井沢健斗、朝野太仁、清水郁郎、岡崎瑠美  
(芝浦工業大学建築学部建築学科)  
タデッセ・ギルメイ、ファシル・ギオルギス  
(アディスアベバ大学 EiABC)

**Applicability of digital measurement technology to Addis Ababa architectural heritage**  
**Sosuke Hisatomi, Satoi Sugiyama, Kento Namaizawa, Taito Asano, Ikuro Shimizu, Rumi**  
**Okazaki**  
**(Shibaura Institute of Technology)**  
**Tadesse Girmay, Fasil Giorghis**  
**(Addis Ababa University, EiABC)**

本研究は、アディスアベバの歴史地区として数多くの建築遺産が残る地域を対象に、住宅建築とその周囲の外部空間、住民による空間の使われ方を包括的かつ効率的にアーカイブすることを目的とする。従来の手実測や写真撮影に加え、3D レーザースキャナーによる点群の収集やフォトグラメトリによる 3D モデル作成といったデジタル計測技術の適応可能性についてフィールドで検証し、最適な記録手法を明らかにすることを目標とする。

近年アディスアベバでは、大規模再開発により歴史地区の多くが非常に短い期間で取り壊されており、歴史的建築物とその土地に根ざした文化、生活が消失する危機に瀕している。建築遺産のみならず周辺の空間も住民の生活に欠かすことのできない領域であり、良好なコミュニティや帰属意識を形成する上で重要な役割を果たしていると考えられる。

2022～24 年にかけて 3 回の現地調査を実施し、複数のデジタル計測技術を使用し建築遺産とその周辺環境の記録作成を行った。

また 2023 年夏には現地調査に先立ち、「東京デジタル・ヘリテージ・ワークショップ」を開催し、アディスアベバ大学から教員 2 名と学生 9 人の計 11 人が来日し、デジタル計測技術のトレーニングを行いながら、アディスアベバにおいての使用について検討した。

\*本研究は JSPS 科研費 19KK0114 及び JST さくらサイエンスプログラムの助成を受け、アディアベバ大学 EiABC と共同で実施した。

エチオピアの都市住宅における住みこなし  
アディスアベバ・アルメニア人地区を対象として  
生井沢健斗、久富颯介、杉山慧、朝野太仁、清水郁郎、岡崎瑠美  
(芝浦工業大学建築学部建築学科)  
タデッセ・ギルメイ、ファシル・ギオルギス  
(アディスアベバ大学 EiABC)

**Livability in Ethiopian Urban Housing  
Case of Armenian District in Addis Ababa**

**Kento Namaizawa, Sosuke Hisatomi, Satoi Sugiyama, Taito Asano,  
Ikuro Shimizu, Rumi Okazaki  
(Shibaura Institute of Technology)  
Tadesse Girmay, Fasil Giorghis  
(Addis Ababa University, EiABC)**

本研究では、アディスアベバにおける歴史地区の一つであり、建築遺産が数多く残るアルメニア人地区を事例に取り上げ、エチオピアの都市住宅で人々がどのように暮らしているか明らかにする。アルメニア人地区はアディスアベバの設立初期に商業の中心地区として発展したアラダ (Arada) に内包されており、かつてのハイレ・セラシエ 1 世の宮殿の敷地、現在のアディスアベバ大学の南に位置する。アディスアベバの設立された 19 世紀末に多くのアルメニア人はさまざまな技術者として住み、宮殿に仕える者もいた。アルメニア人地区はかつて移住してきたアルメニア人が集まって居住し、綿密なコミュニティを築いていた地区である。

近年のアディスアベバでは都市開発が進行する一方で、それによって失われてしまう可能性がある近代都市建築における文化実践の蓄積を保存する論理が求められる。アルメニア人地区ではアディスアベバの近代都市建築が形を残したまま現在も人々の生活の基盤となっているため、その実態を調査することで現代のエチオピアの都市に住まう人々の暮らしのかたちを把握することができると考える。また、現在もエチオピア本来の生活形態との適合性に乏しいまま推し進められる都市開発に対して、この研究がアディスアベバに適した都市計画の方向性を示すための足掛かりになることを目標とする。

本研究の調査では、アディスアベバの近代都市建築とその周辺の住民が一定の生活範囲を一として生活している住宅のまとまりを「コンパウンド」とし、実測と住民へのインタビューを行った。一つのコンパウンドの大きさとそこに住む世帯数、人数、住民同士の関係などについて明らかにした。

\*本研究は JSPS 科研費 19KK0114 の助成を受け、アディアベバ大学 EiABC と共同で実施した。

南スーダン、ロピットにおける頭飾りの物質文化  
歴史的展開とアイデンティティについて  
村橋 勲 (静岡県立大学)

**The Material Culture of Headwear among the Lopit in South Sudan**  
**On the Historical Progress and Identity**  
**Isao MURAHASHI (University of Shizuoka)**

南スーダン東エクアトリア州に居住する東ナイル系農牧民、ロピット (Lopit) では、主に儀礼や狩猟の際に用いられる頭飾りが社会文化的に重要な意味を持ち、彼らが所属する年齢階梯や集団のアイデンティティと密接に結び付いている。ロピットの頭飾りは、その精巧な作りと装飾的なデザインを特徴とするが、それらがいつから製作されるようになり、いかなる用途で使用されているか、また、頭飾りを身につけることはどのような社会的意味があるのかについてはほとんど知られていない。そこで、本発表では、ロピットで製作、使用されている 3 つのタイプの頭飾りを取りあげ、それぞれの素材、構造、用途、歴史的展開についてこれまで明らかになったことを示す。

まず、ヤシの葉を編んで作られた帽子であるロフルク (lohuluk) について。ロフルクは、狩猟やさまざまな儀礼ダンス (葬礼や加入儀礼など) の機会に用いられ、3 つの頭飾りのなかではもっとも一般的である。儀礼のダンスでは、未成年の年齢階梯の男性であるドゥリ・ホルウォンまたはニャルハル (Durri Horwong/Nyaruhalu) が被ることになっているが、最近で成人 (戦士) の年齢階梯の男性であるモニョミジ (Monyomiji) が被ることも珍しくない。また、いくぶん形態は異なるものの、ロピットだけでなく、ロトゥホ、ロコヤ、パリなどの周辺の民族集団においても同様のものが使用されている。

次に、タム (Tamu) と呼ばれる真鍮ヘルメットについて (写真1)。タムは、ロピット全域で製作されているが、主に用いられるのはロピット南部における儀礼ダンスの場である。儀礼ダンスでは、モニョミジだけが被ることが許される。

発表者は、昨年夏、タムとみられるヘルメットをナイロビのアンティークショップで入手し、X線透過装置や蛍光X線分析機器を用いて構造と素材を解析した。その結果、ヘルメットは6枚の真鍮製の板を銅線で縫い合わせることで成型されており、また、頭頂部には何らかの有機物が銅線で編まれていることが判明した。発表者の聞き取り調査によれば、真鍮の部分は銃弾の薬莖、頭頂部のフェルト状の部分は人間の毛髪を素材としているということであり、これは、ヘルメットの分析結果を裏付けるものである。

なお、1861~65年にナイル川の水源を求めてスーダン南部に滞在した探検家、サミュエル・ベイカーは、ロトゥホの集落を訪問した際にタム (ロトゥホ語ではNatamu) を目にした。それによれば、当時のタムはすべて人間の毛髪から作られており、真鍮で覆われた現在の形態とは異なるものだった。それが現在の形態に変化したのは20世紀前半と考えられている。ヘルメットが現在の形態に変化した20世紀前半は、この地域において、エチオピア商人やスワヒリ商人による象牙交易がさかんになった時期にあたる。エチオピア高原のマジ (Maji) とウガンダ東部のMbale (ムバレ) を結ぶ象牙交易の中継地のひとつであるロピットに銃や銃弾がもたらされたことが、このヘルメットの素材の変化と関係があるのではないかと推察される。

最後に、ダチョウの羽根とタカラガイの貝殻などで装飾された頭飾りであるロル（Lolu）について（写真2）。ロルは、タムと同様、儀礼ダンスの場で用いられ、モニョミジだけが身につけることを許される。ロルは、とくに頭飾りの頭頂部に付けるダチョウの毛で作られた飾り玉のことを指すが、頭飾り全体の総称でもある。また、ロルは、頭だけでなく、背中を覆う衣装も特徴的であり、それぞれの部位に名前が付けられている。

エスニックアイデンティティとの関係において、タムとロルを比較することは興味深い。いずれも集落で強い権限をもつモニョミジだけが身につけることが許されているが、前者は主にロピット南部、後者は主に北部の集落で用いられる。タムはロトゥホでも使用されることから、ロピットでは、タムはロトゥホの影響を示すものとして捉えられており、とくに北部の集落においては、ロルをロピットに独自の頭飾りとして捉え、ロピットというエスニックアイデンティティと結び付ける傾向が強い。

以上から、暫定的な結論として次のことが指摘できる。ロピットにおける3つの頭飾りはすべて男性が身につけるが、それを身につけることが許される年齢集団は異なっており、タムとロルがもっとも文化的価値が高いと考えられている。一方、タムとロルでは使用される地域が異なっており、エスニックアイデンティティの差異を示す指標ともなっている。また、タムについては、20世紀前半に現在の形態に変化したと考えられるが、その背景として、当時、エチオピアと東アフリカの間でさかんになった象牙交易の影響があると推察される。



写真1 タムを被った男性



写真2 ロルを身につけた男性の後ろ姿

\*写真はいずれもロピット人インフォーマントからの提供。

注

本発表の基となる調査研究は、JSPS 科研費若手研究（課題番号：23K12342、代表者：村橋勲）の助成を受けて2023年度に実施した。また、ヘルメットの分析については、東京藝術大学の田中眞奈子准教授にご協力いただいた。



## Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究⑧

ともに描き歩むウォリソ産地下足袋の未来

田中利和（事業構想大学院大学）、是恒さくら（美術家）、ウォリソの人びと

## Engaged Area Studies to Creating Ethio-Tabi⑧

The Future of Woliso Jika-Tabi through Drawing and Walking Together

Toshikazu TANAKA (The Graduate School of Project Design), Sakura KORETSUNE (Artist),  
Woliso People

Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究は、エチオピア産地下足袋 (Ethio-Tabi=エチオタビ) の創造にまつわる研究、開発、普及、事業、芸術をめぐる、多様な人びとがともにフィールドワークをおこなってきた。この協働を通じて多彩なフィールドが共鳴することにより、ユニークな超学際研究とエチオタビ文化が多様なかたちで内発的かつ持続的に発展していくことを目指している。エチオタビにまつわる一連の試みを動的に記録し分析することによって、協働性と創造性の特質と実践的地域研究の醍醐味について探究する。そして、未来につづく多様な形を構想し挑戦をし続けることを目的としている。

8年連続となる本発表では、2023年度のポーラ美術振興財団の国際交流助成「ともに描き、ともに歩む、エチオピア牛耕農村の未来～エチオピア産地下足袋『エチオタビ』の旅から～」でおこなった、フィールドワークと展示について報告する。フィールドは、エチオピアオロミヤ州南西ショワ県、ウォリソ市と農村で、渡航期間は2023年12月27日（水）から2024年1月4日（木）までの9日間であった。国内の展示は、京都市左京区北白川伊織町40に位置する、梅棹忠夫旧邸ロンドクレアントで、2024年3月5日（火）から3月10日（日）までの期間6日間おこなった。

ウォリソでのフィールドワークの前に、首都アディアスアベバで、エチオタビの製作者であるウォリソ出身で起業家のカッバラと合流をした。今回の渡航の意図を説明し、今回の渡航に必要な白いエチオタビの制作の材料購入をともにおこなった。ウォリソでは、カッバラを中心とした職人たちによるエチオタビの製作過程を半日間かけて観察し、動画で記録をした。

2020年1月に是恒が中心となってウォリソの人びととともに描き141枚の絵から紡ぎ上げ製作したオロモ語・アムハラ語・日本語・英語の多言語絵本『うしのあし ひとのあし』を関係者には是恒から直接手渡し作品の印象を伺った。フィールドに根差した協働作品は、多くの地域住民から好感と感謝の言葉をもらうだけでなく、芸術をつうじた人びとの豊かな交流の可能性を感じられる機会となった。

前回2020年1月におこなった農村での展示同様、ウォリソの人びとと家屋前の青空のもとに線を張り、吊るすための三角の画用紙に絵を描く作業をおこなった。今回は、是恒の発案でスケッチブックの画用紙を、彼らが描く地下足袋の輪郭に切り取りとったものも現地で用意した。野外にシートを広げ、日本から持ち込んだ、三菱鉛筆株式会社の鮮やかな発色が特徴の「ポスカ」で、この三角と地下足袋形の輪郭の画用紙に、彼らの日常を自由に描いてもらった。同時に約1.2m四方の布を持ち込み、中心にも地下足袋の輪郭を描いてもらい、そのまわりに自由に描いてもらった。誰が何を描いているかなどのプロセスを動画で記録したうえで、個々の絵の作者がわかるよう写真撮影もおこなった。

現地での展示当日は、地下足袋型の画用紙は72枚、三角の画用紙45枚に描かれた絵を、家屋の前で線がクロスするように張って吊るし、家の外壁にも飾った。コロナ禍で渡航が叶わなかった2020年

から 2023 年の間にカッバラに製作を依頼していた、エチオタビ 100 足を地面に並べ、牛を屠り食事をしながらエチオタビと今回描かれた絵を鑑賞した。その後、インフォーマントかつモデルとなる関係者には指名をし、着装してもらいポーズをとり撮影をした。集まってもらった人びとにもエチオタビを無償で開放し、同様にさまざまなポーズを自由にとってもらった姿を撮影した。

フィールドでの展示の企画、準備をつうじて、是恒に「絵」の描き方を学びたいと言って現れた農村の青年ウォンドセンとのエピソードを紹介する。画材が高価なうえ、絵の描き方を学校では教えてもらえなかった彼に、是恒は庭の片隅で鉛筆やペン、水彩による濃淡のつけ方、色の混ぜ方などを実演しながら、絵を描く時間をともにした。インターネットで見つけた画材を模写しているという彼に、身近なものや実物を見ながら描いてはどうかという提案を是恒がしたところ、ウォリソの特徴的な家や家畜など、身近なものの造形やイメージと、彼独自のとらえ方、着色があわさり、さらに魅力的なものとなっていく。ウォリソでの地下足袋作りは、デザイン・裁断・縫製・縫い付けと異なる技術をもつ職人の技が集合することで製作される。今回の渡航ではそこに絵を描く、ウォンドセンが加わり絵付けをされた地下足袋は、一足一足がさらに特別なものとなった。

以上のフィールドワークの成果発表を、京都のロンドクレアントで展示報告という形でおこなった。以前に地下足袋老舗メーカーの丸五のフラッグショップ MARGO TOKYO でおこなった展示の、パネルや絵本、原画、エチオタビも一部再利用した。ウォリソでの展示を再現するようなかたちで、ロンドクレアントのギャラリースペースの天井付近に、ウォリソの人びとによって 2 回の渡航で描かれた絵、合計約 300 枚の絵を紐で吊るし飾った。ウォンドセンがスケッチブックに描いた絵を現地で額装したものを壁に飾った。その前に、絵付けしたエチオタビを展示した。これまでの、ウォリソの職人カッバラを中心に作られたエチオタビにキャプションをつけて、会場入り口に過去のものをおき、奥に歩むにつれて現在のモデルとなっていくよう配置した。その先につづく中庭手前には、是恒による「紙から布へ、描かれたものを縫い取る」と題した、白い布のエチオタビに刺繍された作品が展示された。ウォリソの人びとが地下足袋の画用紙に描いた絵をモチーフとし、カラフルな糸でチェーンステッチの刺繍を施した作品である。また、是恒は、現地のエチオタビ製作と展示の様子を動画編集した映像作品も上映した。中庭と接する別の通路には、エチオピアのウォリソにみられる特徴的な、生活にまつわるさまざまな用品も、展示をした。

この展示にまつわるトークイベントは 2024 年の 3 月 5 日（火）と 6 日（水）2 日にわけて 2 時間ずつおこなった。1 日目は、アフリカとエチオピアの文化や芸術への造詣が深い専門家をゲストとして招聘し、来場者も含めて意見交換をおこなった。2 日目は、岡山を本社とする地下足袋メーカー「丸五」の会長をゲストとして招聘し、来場者も踏まえて議論をおこなった。これまでのエチオタビのプロジェクトを、市民社会に開かれた「展示」という形で表現することで、これまでの実践を別の角度からふりかえることができた。また来場者を含め、さまざまな人びととの会話を通じて、今後の研究、事業、芸術などの多軸的な展開について検討することができた。

Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究は、エチオピア、ウォリソに暮らす牛農耕民の生活を長期にわたりともに理解し、農作時の人びとの足を護るという根源的な地下足袋の役割を担った履物を創造する道を歩むことにある。それと同時に、エチオタビに興味、関心をもって集まる多様な人びととの、得意なことを活かした協働を通じて、未知なる道をともに歩むことで、あらたな未来を創造的に描くことができる。最後に来年度の本学術大会の「Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究⑨」の展望と構想について、研究・事業・芸術の観点から述べる。

**Urban Redevelopment and Architectural Heritage in Piazza, Addis Ababa**  
**An Overview of What is Happening in the Vicinity**  
**Tadesse Girmay (Addis Ababa University, EiABC)**  
**Rumi Okazaki, Sosuke Hisatomi, Sato Sugiya, Kento Namaizawa, Taito Asano**  
**(Shibaura Institute of Technology)**  
**Keita Aoshima (Otemon Gakuin University)**  
**Nobuhiro Shimizu (Hokkai-Gakuen University)**

The unexpected urban redevelopment decision in Piazza, Addis Ababa, has raised concerns about the susceptibility of urban and architectural heritage in the area. Recent redevelopments in other areas of the city have shown a total clearing of the urban fabric, with some historic buildings being demolished to make way for the new developments. The action disrupted the livelihood of the inhabitants, who were highly dependent on their city center neighborhood. In a similar way, the intervention for rapid change poses a threat to the preservation of the architectural heritage of Piazza and raises questions about the balance between modernization and Preservation. The decision to clear the urban fabric in the area has sparked debates among residents, urban planners, sociologists, writers, tourism experts, and heritage conservationists to mention a few.

The demolition signifies a disregard for the preservation of the neighborhood's unique character and identity. The total clearing of the urban fabric has erased historic buildings of more than a century and a quarter old with immense cultural value, impacting the sense of place and heritage of the community. This abrupt decision underscores the importance of informed and inclusive urban planning processes that prioritize the conservation of architectural heritage. The susceptibility of architectural heritage in the face of rapid urban redevelopment highlights the importance of sustainable development practices and the need for careful consideration of the cultural and historical significance of the built environment.

Moving forward, it is essential for stakeholders to collaborate and find a balance between urban development and heritage preservation in Piazza. By adopting inclusive planning processes, incorporating heritage conservation guidelines, and engaging with the community, it is possible to achieve a harmonious blend of modernity and historical preservation in the neighborhood. This abstract underscores the urgency of addressing the susceptibility of architectural heritage in the face of unexpected urban redevelopment decisions in Piazza, Addis Ababa.

Keywords: Urban, Redevelopment, Heritage, Piazza, Preservation

## 創出される気鳴楽器の演奏実践：エチオピア西南部を事例として

田中綾華（京都大学）

### Encouraging the activities of the musical instruments: woyisa in southwestern Ethiopia

Ayaka Tanaka (Kyoto University)

本発表の目的は、エチオピア西南部アリ地域におけるタケ製気鳴楽器オイサ（woyisa）を用いた演奏実践が、2010年代からはじまった新たな取り組みを社会・政治的な背景をふまえて描き出すことである。オイサは、エチオピア西南部アリ地域において、農業従事者らが農作業や冠婚葬祭の場面で演奏する、タケを素材とした指孔がない非貫通型の気鳴楽器である。6管を1組として、笛の上部にある歌口に息を吹き込んで演奏する。発表者は、エチオピア西南部にある標高約2000mに位置するP村にて、2023年9月から2024年1月まで約130日間の現地調査を実施した。主な調査対象は、P村のオイサ演奏集団Zの構成員28名（男性20名、女性8名、30代後半～60代）と集団Dの構成員20人（男性14名、女性6名、10代～30代）である。集団Zの構成員には3名のリーダーがいる。集団Dのリーダーは集団Zと同様の3名がつとめている。集団Dが演奏をおこなうさいは、構成員の男性2名がリーダーの役割をつとめる。集団の構成員はいずれも農業を生業としており、2名の女性が酒の販売もおこなっていた。集団Zや集団Dの構成員の多くは在来宗教またはエチオピア正教を信仰し、音楽演奏を行っている一方で、集団Zのリーダー3名はプロテスタントを信仰しており、音楽演奏には参与していない。

調査の結果、集団Zと集団Dのオイサの演奏実践について、以下の4点が明らかになった。

(1) 村人たちがプロテスタントへ改宗し始めたことや、近代学校教育の普及など、外部から制度が流入したこととも関連して、共同労働やブクメル（10代の男女が歌や踊を楽しむ機会）でのオイサ演奏の奏機会が減少していた。集団Zの奏者のなかには、演奏機会や奏者の人数が減少することに危機感を覚えているものがいた。2) 2010年代から、県や郡政府が主導して文化的なイベントが開催されはじめた。J市では2009年から新年を祝う祭りとして新たにデシタギナ（Dishta Gina）が開催されはじめた。集団Zは、2021年に郡政府の要請を受けて集団を組織し、音楽活動を開始した。結成以来、県や郡の行政からの演奏依頼（主に祝祭や式典）に応じて活動をおこなっていた。(3) 集団Zのリーダーは、オイサの製作や演奏技術の継承のため、集団Zの他のメンバーや村役場の役人などにも協力を仰ぎながら、次の2つの活動に取り組んでいた。1. 集団Dを発足：集団Dは2023年9月に活動開始し、技術習得の場であったブクメルの再興を目的としていた。集団Dの構成員は、集団Zのリーダーをつとめる3名がによって選抜された。2. 子どもに対して演奏に参加する機会を提供：2024年9月に、集団Zの奏者の一人（副リーダー）が中心となり、学校の長期休み期間に、学校敷地内で、子どもたちがオイサの演奏を聞いたり、実際に演奏に参加して体験したりする機会をつくることを目的にして、地域の小学校と連携して音楽演奏の活動計画をたてていた。

今回の調査により、共同労働や冠婚葬祭など地域の生活文化のなかで実践されてきたオイサ演奏は社会状況の変化によって、住民組織と強く結びついた実践から、行政が主催する祝祭や式典行事と結びついた実践へと変化していることが明らかになった。集団Zは、音楽演奏をする場をP村から県外、州外へと地理的に拡大していた。また、祝祭日で演奏を被露することに加えて、州政府が企画した式典（Nations, Nationalities and Peoples' Day）に参加するなど、アリ人としての民族意識を高揚させるような場での演奏活動が増加している傾向がある。その一方で、集団Zのメンバーは、子どもを対象とした演奏団体を発足させたり、オイサの製作・演奏技術を継承していくための新しい取り組みをP村内ですすめている。

アリ地域におけるオイサの演奏実践は保護されるべき伝統芸能や観光資源としてだけではなく、行政からは、アリ人の文化をあらわす音楽であり、アリ人としての民族意識を高揚させる役割が期待されていると考えられる。今後の調査では、アリの人々が、これまでになかったオイサの演奏実践をどのように受け入れ、とらえているかという点について、オイサ奏者、村でオイサ演奏を享受している人々、アリ県や南アリ郡の文化観光課の職員など様々な立場の人々に対して調査をおこなっていく。

**Urban Redevelopment and Architectural Heritage in Piazza, Addis Ababa**  
**Case of Former Residence of Minas Kerbekian**  
**Satoi Sugiyama, Sosuke Hisatomi, Kento Namaizawa, Taito Asano, Rumi Okazaki**  
**(Shibaura Institute of Technology)**  
**Tadesse Girmay (Addis Ababa University, EiABC)**  
**Keita Aoshima (Otemon Gakuin University)**  
**Nobuhiro Shimizu (Hokkai-Gakuen University)**

This research focuses on the former Minas Kerbekian residence, which was demolished at the end of March 2024 due to large-scale redevelopment of the Piazza area, together with many other historic buildings. Minas Kerbekian was an Armenian engineer who worked on numerous civil engineering and construction projects in Addis Ababa in the early 20th century. The former Minas Kerbekian residence is located on a small street off Dej. Jote Street, near Itegue Taitu Hotel. It was a 5-story mid-rise building that blended into the surrounding environment and has been home to many people over the years. It was a mixed structure building, with lower part made of masonry and upper part made of wood. At the time of demolition, it had at least 50 rooms, including the additions, and was said to have housed 300 people.

Prior to demolishing the building, the research team conducted measurements of the building, took photographs, and interviewed residents on March 25th. Before demolition, many people lived there and it was difficult to enter and survey, but fortunately, the team was able to obtain permission from the residents a few days before the demolition. The survey revealed the actuality of the space and usage of the building and how it housed large number of residents.

Although this house was listed in the historic building list (Registration no. ET/AA/AR/I/073), it was demolished by March 30<sup>th</sup>.

**Architectural Heritage of Quien Village**  
**Case of Former Residence of Riese Deбри Gebremariam**  
**Rumi Okazaki (Shibaura Institute of Technology)**  
**Alula Tesfay Asfha (Goethe University Frankfurt/ Mekelle University)**  
**Tadesse Girmay (Addis Ababa University, EiABC)**  
**Selam Gebrekiristo, Semhal Tadesse (Mekelle University)**  
**Mulugeta Fisseha (Adigrat University)**

Quien is a village located in the North-East of Quiha in Tigray region. The river, May Enda Estiphanos, runs along a deep valley next to the village, creating fertile land ideal for farming, abundant water for daily life, and beautiful landscape. Politically it was center of the local areas of villages during imperial time, and it is said that the village was also related to salt trade (*arho*). It is far from major asphalt-paved roads, and compared to other areas, infrastructure development is lagging behind, and until recently, many people lived in traditional ways. As a result, numbers of traditional *hidmo* remain, making it a rare area to have a large concentration of the original *hidmo*. In recent years, many residents have moved to the city, and vacant *hidmos* are scattered throughout the area.

In February 2024, the research team made a preliminary investigation of the architectural heritage in Quien to investigate the outstanding structures of the remaining *hidmos*. The researched buildings include the former residence of Riese Deбри Gebremariam (1900-83 GC), the most magnificent residence in the village, St. Mikael Church, a *hidmo* church built on a small hill next to the valley, and Estifanos Church, an abandoned old church next to the valley cliff. Interviews were done with the priest and monk of the church and the son of Riese Deбри Gebremariam, which provided a family and architectural history of the *hidmo* residence as well as land acquisition, material procurement, and construction process. The overall building process clues the way in which such large-scale *hidmo* construction could be carried out in a small village.

Keywords: Quien, Riese Deбри Gebremariam, St. Mikael Church, Estifanos Church, *hidmo*

第33回日本ナイル・エチオピア学会学術大会事務局：中村香子（委員長）

大会事務局連絡先：〒112-0001 東京都文京区白山5丁目28-20

東洋大学 国際学部国際地域学科

事務局専用メールアドレス：33rd.janes@gmail.com

Secretariat of the 33rd Annual Conference for JANES

Kyoko Nakamura,

Department of Regional Development Studies, Faculty of Global and Regional Studies, Toyo University

5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8606.

Email: 33rd.janes@gmail.com